

京都府埋蔵文化財情報

第132号

平成28年度における京都府内の発掘調査とその周辺	小池 寛	1
考古学者・樋口隆康先生と文化財保護		
ー京都府における遺跡の調査研究と保護を中心にー	杉原和雄	9
有畦式平窯の成立について	石井清司	17
平成28年度発掘調査略報		28
11. 佐伯遺跡		
12. 芝山遺跡第16次(B地区)		
平成28・29年度発掘調査略報		33
1. 北大塚古墳		
2. 岡田国遺跡第4・5次		
長岡京跡調査だより・128		37
現地公開状況(平成29年2月～平成29年9月)		39
普及啓発事業(平成29年2月～平成29年9月)		40
センターの動向(平成29年2月～平成29年9月)		42

2017年10月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

平成 28 年度における京都府内の 発掘調査とその周辺

小池 寛

1. はじめに

平成28年度の当調査研究センターの発掘調査件数は、22遺跡におよんでいる。事業別に見ると、新名神高速道路関係遺跡の調査件数が多く、地域的には、丹後地域での調査件数が徐々に増加している。

ここでは、平成28年度に京都府内で実施された発掘調査の成果について、当調査研究センターの事業を中心に振り返るとともに、埋蔵文化財保護行政を取り巻く関連事例についてもふれておきたい。なお、京都府内全域を対象にした調査成果の概要は、すでに京都府教育委員会から『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成28年度)』として刊行されている。併せてご覧いただきたい。

2. 各時代の調査成果とその周辺

(1) 旧石器・縄文時代

亀岡市^{さえき}稗田野町佐伯遺跡では、縄文時代後期の土器を伴う土坑が検出された。亀岡市域では天川遺跡や千代川遺跡等で縄文時代後期を中心とする遺構や遺物が確認されているが、今回、新たな検出例を追加することとなった。今後、縄文時代の各時期の集落動態を考えていくうえでの基礎資料となった(当調査研究センター)。

(2) 弥生時代

・京丹後市久美浜町^{にょう}女布遺跡では、ほ場整備に伴う発掘調査で弥生時代後期集落の一部を確認



写真 1 丹波丸山古墳 全景 (東から)

した。周辺域での弥生集落の存在が確認できた希有な事例となった。なお、浮子として使用されたと考えられる軽石が出土しており、日本海に漂着した軽石利用を具体的に把握できた意義は大きい(当調査研究センター)。

・八幡市^{みのやま}美濃山遺跡では、弥生時代後期の竪穴建物が確認された。当該遺跡では、すでに同時期の集落遺構が検出されているが、集落の範囲を推定するうえで、基礎的な調査事例となった(当調査研究センター)。

(3)古墳時代

・京丹後市峰山町^{たんばまるやま}丹波丸山古墳群では、中心的な円墳1基と階段状に区画された墳墓6基を検出した。円墳である32号墳は、長径28m、短径25mの不整形な円形であることが判明するとともに、墳頂部では5基の埋葬施設を確認した。副葬品は、鈿1点であった。舟底状木棺を納めている点や副葬品が少ない点、そして、小破片の土師器から古墳時代前期の築造であることが判明した(当調査研究センター)。

・舞鶴市^{とうこうじ}東光寺跡の発掘調査において、6世紀後半に築造された残存長4.85m、玄室幅1.35mの横穴式石室が確認された。「東光寺古墳」と命名された(当調査研究センター)。

・亀岡市^{ろくや}葺田野町佐伯遺跡では、古墳時代後期の竪穴建物が確認された。なお、周辺には鹿谷古墳群に代表される後期群集墳が多数築造されているが、今後、集落と古墳群の関係を考えるうえで重要な調査事例となった(当調査研究センター)。

・京都市西京区^{しば}芝古墳では、後円部の直径が23mであったことが判明した。また、造り出しが存在する可能性も指摘された(京都市文化財保護課)。

・向日市寺戸町^{いつかはら}五塚原古墳において4世紀中葉の埴輪棺が確認された。出土した埴輪は、同妙見山古墳の埴輪と共通する要素が認められ、時期の異なる古墳を結び付ける資料として、注目される(向日市埋蔵文化財センター)。



写真2 東光寺跡 横穴式石室検出状況 (南から)

・全長180mを測る南山城地域最大の前方後円墳である城陽市久津川^{くつかわるまつか}車塚古墳の造り出しが、南北約20m、東西約12mであることが確認された。また、出土した冢形埴輪の上端部と屋根の水平部が三角形に尖った構造をもっていることも確認された。当該埴輪の多様性が確認できた意義は大きい(城陽市教育委員会)。

・長岡京市井ノ内^{いのうち}遺跡・今里^{いまさと}遺跡では、古墳時代後期集落の一部を検出した。周辺域でも同時期の遺構が検出されており、集落の構造を考えるうえで、新たな事例を追加することができた(長岡京市埋蔵文化財センター)。

・長岡京市に所在する史跡乙訓古墳群の井ノ内^{いのうち}車塚古墳では、6世紀前半に構築された横穴式石室が検出された。石室の検出長は4m、幅2mを測り、須恵器などの副葬品とともに、赤色顔料なども確認された。横穴式石室を埋葬施設として有する首長墓の詳細が徐々に判明している(長岡京市埋蔵文化財センター)。

・宇治市に所在する5世紀後半の二子山^{ふたごやま}古墳南墳の調査において、墳丘規模が直径30mであることが確定した。なお、北墳は、5世紀中葉に築造された直径40mの円墳であることが、昭和43(1968)年調査により確定している(宇治市まちづくり推進課)。

・八幡市女谷^{おんなだに}・荒坂^{あらか}横穴群の調査では、あらたに7基の横穴墓を検出した。横穴墓毎の床面の標高の違いや平面的な位置関係、そして、出土遺物などから構築順序を復原する根拠を得ることができた(当調査研究センター)。

・城陽市芝山^{しばやま}遺跡と同一丘陵に所在する芝山古墳群B地区においては、一辺9mと13mのいわゆる低墳丘の方墳を2基確認した。古墳2の中央部において埋葬施設を3基確認しており、四獣形鏡や瑪瑙製勾玉、碧玉製管玉、緑色凝灰岩製管玉が出土した。また、古墳の周辺では、埴輪棺を3基確認した。一方、D地区では古墳時代後期の低墳丘の円墳2基を検出した。芝山遺跡では、16次の調査回数を数えており、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代の多大なる調査成果があり、遺跡



写真3 女谷・荒坂横穴群 横穴検出状況 (北から)

全体の考古学的な総括をする段階に、ようやく至ったといえる(当調査研究センター)。

・綴喜郡井手町^{きたおおつか}北大塚古墳群では、残存状況が不良ながら、3基の横穴式石室が築造されていることがわかった。比較的小規模な横穴式石室で構成される群集墳である(当調査研究センター)。

(4)飛鳥・奈良時代

・宮津市に所在する奈良～平安時代の^{あんこくじ}安国寺遺跡において、直径0.8～1mの非常に規模の大きい柱穴が複数確認された。周辺には、丹後一宮である籠神社や丹後国分寺などが所在することから、丹後国府の一部ではないかと考えられている。今後、隣接地の調査により、国府の構造や範囲などが徐々に明らかになるものと思われる(宮津市教育委員会)。

・福知山市大江町^{あらす}阿良須遺跡は、由良川に近接した地点に営まれた集落遺跡であるが、平成28(2016)年の発掘調査では、飛鳥時代のほぼ完形な状態を保った土師器の甕が複数個体出土した。堆積状況から由良川の氾濫によってもたらされた遺物群であることがわかった。由良川周辺域における災害の歴史を考えるうえで重要な発掘調査例となった(当調査研究センター)。

・亀岡市蕨田野町^{さく}佐伯遺跡の発掘調査では、奈良時代の掘立柱建物や蹄脚円面硯、「正福」と書かれた墨書土器等が確認された。一帯に公共性を帯びた施設の存在が想定される(当調査研究センター)。

・城陽市^{あさぎ}芝山遺跡では、奈良時代の掘立柱建物7棟を検出するとともに、瓦等も出土した。芝山遺跡では、既往の調査において計画的に配置された掘立柱建物群や道路の側溝、井戸等が確認されており、駅家などの性格をもつ遺跡として評価されてきた。今回の調査地点は、施設の中心から外れているものの、周辺域にも同時期の建物が広がっていることを明らかにした(当調査研究センター)。

・木津川市に所在する聖武天皇が造営した史跡^{くにきゅう}恭仁宮跡において、出勤官人の待機施設である朝集院の塀基礎の柱穴が確認された。これにより、朝集院は東西134m、南北125mの規模であったことがおおむね把握できた。なお、瓦の出土はないことから、板葺きの可能性が指摘されている(京都府教育委員会)。

・木津川市に所在する^{おかだくに}岡田国遺跡では、路面に轍の痕を残す幅6.7mの南北道路とそれに直交する幅7mの東西道路を検出するとともに、直交する道路の北東には、小規模な掘立柱建物が計画的に配置された状況で確認された。一方、出土遺物には「越後」と書かれた墨書土器をはじめ、律令の土器様式の範疇で捉えうる土師器や須恵器等も出土した。当該地の北方で直線的な溝が確認された上粕北遺跡等もふくめ、恭仁宮の周辺の諸施設が徐々に明らかになりつつある(当調査研究センター)。

(5)平安時代

・亀岡市千代川町^{ちよかわ}千代川遺跡では、平安時代の掘立柱建物を2棟検出するとともに墨書土器が出土した。歴史地理の分野では、千代川遺跡周辺の整然と区画された水田が、丹波国府の痕跡ではないかとの指摘があるが、当該調査により推定丹波国府周辺域の状況が把握された意義は大きい(京都府教育委員会)。



写真4 岡田国遺跡 建物群検出状況（東から）

・ 亀岡市篠窯跡群^{しのかまあと きば が たにかま}騎馬ヶ谷窯跡では、8世紀末から9世紀中頃に操業された4号窯と10世紀初めの7号窯の調査が行われた。特に、7号窯は、2か所に焚口をもち、焚口部分の天井部が残存していたことから、窯体の一部から焼成された須恵器を窯出した可能性が指摘された（亀岡市教育委員会）。

・ 京都市上京区の東京極大路と一条大路の交差点以東において、一条大路の北側側溝の延長部が約35mにわたって確認された。長岡京から遷都直後には京外へ続く大路が敷設されていることがわかった。周辺には藤原良房の染殿や藤原道長の土御門殿などの邸宅が所在していることから、それらの造営に合わせて周辺開発が行われていたことを示す遺構ではないかと考えられている。なお、側溝は、9世紀中葉には埋められており、鎌倉時代までには約10m南に造り直しが行われていることも判明した（京都市埋蔵文化財研究所）。

・ 京都市中京区では、平安時代の貴族である藤原為元の邸宅跡と考えられる施設から酒器とみられる土師器の小皿が数千枚出土した。当時の酒宴に使用された土師器の皿は、一度使用する毎に廃棄していたと考えられることから、大量の土師器皿の出土につながったと考えられる（国際文化財）。

・ 京都市岡崎に所在する六勝寺の一寺院である^{えんしょうじ}円勝寺跡の発掘調査では、寺域の南限の溝が確認された。これにより寺域南北が100mであることが推定されるに至った。なお、溝から赤色顔料であるベンガラや韃羽口などが出土しており、寺院の修理等も行われたことが推定された（京都市埋蔵文化財研究所）。

・ 乙訓郡大山崎町に所在する史跡^{おおやまざきかわらがま}大山崎瓦窯跡では、新たに2基の瓦窯が確認された。今まで南北方向に5基、東西方向に5基の瓦窯が整然と構築されたことがわかっていたが、全体で12基からなる瓦窯跡であることがわかった。窯跡は、いずれも全長3.9m、幅2.1m、燃烧室長2.1m、焼成室長1.5mと統一された規格であり、官窯の実態をよく示している（大山崎町教育委員会）。

(6) 鎌倉・室町時代

・京都市北区金閣寺の前身で、足利義満が晩年を過ごした北山殿に建造された北山大塔の相輪の一部が初めて確認された。出土した九輪は、室町時代の遺物包含層から出土しており、直径2.4mに復原できることから、現存する東寺の五重塔の宝輪の直径が1.6mであることを念頭におけば、塔高110mを測る七重塔として復原された。日本史上、最も高い木造建築であった可能性が指摘された(京都市埋蔵文化財研究所)。

・京都市下京区^{へいあんきょうさきょうしちじょうにぼうごちょう}平安京左京七条二坊五町・^{ひがしいち}東市跡(龍谷大学大宮キャンパス)の発掘調査において、鎌倉時代の鍛冶工房が確認されるとともに、室町時代の直径23cmの青銅製の鍋などが出土した。当該地は、東市の一画にあたり、鎌倉時代以降も商業地として栄えていたことを明らかになった(龍谷大学)。

・京都市伏見区に所在する伏見城城下町では、安土桃山時代の島津家屋敷の石垣の一部と金箔瓦等が確認された。伏見城に近いことから、島津本家当主の屋敷の可能性も指摘されている(京都市埋蔵文化財研究所)。

・京都市北区に所在する^{おどい}御土居跡の発掘調査で、御土居の中に溜まった雨水を排水するために敷設された溝が検出された。溝は、長さ10m、幅1.5mを測り、溝の中央には礫を充填した幅0.4mの暗渠が敷設されていた。御土居の調査において排水用暗渠が検出される事例は希有である(京都市埋蔵文化財研究所)。

・京都市上京区京都府警察本部新庁舎建設に伴う^{へいあんきょう}平安京跡の発掘調査で、検出長10m、幅5m、深さ3.5mの直線的な堀が検出された。堀を掘削した以後は、幾度となく溝浚えが行われたようで、掘削時期を示す遺物はわずかであった。一方、堀は、16世紀後半に一気に埋められた様相を呈していた。戦国時代に京都の中心部が焼け野原になった後、「上京」と「下京」がそれぞれ発展して行く過程の中、上京全体を防御した「惣構」の可能性が指摘された。なお、堀の断面観察から堀の内側に掘削土によって築かれた土塁がめぐっていた可能性も指摘された。堀が埋められた後の大名屋敷の一部と考えられる遺構から金箔瓦も出土した(当調査研究センター)。

・向日市物集女町に所在する^{もずめじょう}物集女城跡では、柱穴や溝等が確認され、城館の構造を知る手がかりが初めて確認された(向日市埋蔵文化財センター)。

・向日市寺戸町^{てんちやう}殿長遺跡では、長岡宮北限推定地に該当する地点の調査を実施した。長岡京期の遺構は検出されなかったが、中世の瓦器碗などが出土するとともに、井戸などが狭小な面積であったが確認できた(当調査研究センター)。

・宇治市の史跡^{うじがわたいこうつつみ}宇治川太閤堤跡において、水流調整のための石出しと護岸施設である杭出しが良好な状態で確認された。石出しは3.5mの高さを有しており、岸部から本流に舌状に張り出している。また、石出しの下流では、直径13cmの丸太杭を2列に打ち込んでいる。宇治川の流れの速さに備えた太閤堤の構造を考えるうえで重要な調査例である(宇治市まちづくり推進課)。

(7)江戸時代

- ・伏見城跡^{ふしみじょう}で、17世紀の池沼から人名などが記され木簡が出土した(当調査研究センター)。

(8)発掘調査とその周辺

- ・中世^{よど}淀古城については、従来、島之内の開発を契機に江戸時代に入って納所から島之内に城が移転したと考えられてきた。しかし、長岡京市『岡本雅男家文書』を調査した大阪大谷大学馬場隆弘氏は、神人であった藤岡氏が、淀中州の開発により淀藤岡城を築城し、武家勢力であった小島氏は、それとは別に淀小島城を築城していたと推論した。

- ・夏休みの期間中「勾玉をつくろう！」と題した考古学体験講座を実施した。3日間で6講座を開催し、約160人の小学生が参加した。タッパーにはった水の中に置いた砥石で石材の角を削り、サンドペーパーで勾玉の形に仕上げてから、耐水性のサンドペーパーで磨いて、染料インクで着色を行った(当調査研究センター)。

- ・東アジア地域で初めて世界考古学会議第8回京都大会(WAC8)が、京都で開催された。130カ国から16,000名が参加し、182の分科会において「開発」「科学」「災害」「戦争」をはじめ、「アート」などについてのテーマで8月28日から9月2日まで同志社大学をメイン会場として開催された。当調査研究センターでは、平安京跡(府警本部建設予定地)において、日本における都市遺跡の発掘調査の実際を海外の研究者にご覧いただいた。特に、ベルトコンベアーによる排土集積に興味深く見学する研究者が多くみられた。

- ・福知山市三和町において確認されていた古生代「ペルム紀」(Permian)と中生代「三畳紀」(Triassic)の境界線であるP/T境界堆積層は、全国的にみても非常に希少な事例であることから、その保全を目的に市天然記念物に指定された。2億5000年前の貴重な痕跡として、無断採取等を禁止するなどの方策がとられた(福知山市教育委員会)。

- ・昭和40(1965)年に京都府教育委員会が向日市鶏冠井町で実施した発掘調査で検出された長岡京跡の路面上に残った轍の型取り模型が、現在、府立山城郷土資料館に収蔵されているが、乙訓の文化遺産を守る会が、長岡宮があるまち向日市のPRとなればと現状確認と「里帰り」への取り組みを行った。長さ6.48m、幅3.8m、高さ0.66mと模型の規模も大きく、今後、展示スペースの確保等が検討される。

- ・日本考古学のみならず東アジアやシルクロード考古学研究で著名な京都大学名誉教授で当調査研究センター理事長などを歴任された樋口隆康先生が平成27(2015)年4月に逝去された。その研究業績を称える展示が城陽市歴史民俗資料館で開催された。三角縁神獣鏡研究やガンダーラ仏像研究の最前線で研究されたご業績は、あまりにも有名だが、そのご業績と城陽市との深い関係を示す展示とあって、連日、多くの見学者が訪れた。なお、本誌に公益財団法人向日市埋蔵文化財センター杉原和雄理事長が、先生を偲ぶ追悼文を寄せてくださった。

- ・八幡市の松花堂美術館では、石清水八幡宮の屋根を飾った鯰瓦が展示された。鯰瓦は、高さ1.2mを測り、江戸時代後期に八幡で生産されたことが伝わっている。

- ・長岡京市に所在する乙訓最大規模の前方後円墳である恵解山古墳公園に樹立された復元朝顔

形埴輪4点が、何者かによって破損されていることがわかった。古墳時代中期に築造された全長128mの前方後円墳であり、平成26(2014)年に墳丘などが整備され、市民に開放された古墳公園として開園した。

・亀岡市葎田野町佐伯遺跡では、葎田野町自治会などが主催し、地元の小学生の遺跡見学が行われた。学校主体の遺跡見学会は一般的であるが、自治会が主催し、見学会の後、餅つき等をして地域と小学生が交流を深める心の教育の実践に遺跡見学が活用された希有な事例である。

・京都府や京都府立大学、京都府立総合資料館などが「京都学」の拠点として「京都府立京都学・歴彩館」を12月26日に開館させた。2階建で24,000㎡の広さを有している。当該地では、建設に伴い植物園北遺跡の発掘調査を当調査研究センターが実施しており、今後、歴彩館での関連イベントも構想されていると聞く。

・京都市文化財保護審議会は、2月21日に伏見区に所在する院政期の政治的中核地であった鳥羽離宮跡の出土品を文化財に指定するように答申した。金属製品や玉類、そして、播磨産の瓦類が多数含まれている。

・平成23(2011)年に当調査研究センターが発掘調査を実施した国宝清水寺本堂の平成大修理にともなう覆屋の素屋根組立てが開始された。平成32(2020)年度まで工事は継続される。

・京都府内で発掘調査を実施している大学、京都府、市町村、法人調査機関が一堂に会し、「京都府埋蔵文化財研究会」を運営している。12月10日(土)に福知山市において「近世城郭から考える諸問題」と題して、約100名の出席者で開催された。

おわりに

平成28年度における京都府内の発掘調査とそれに関連する事例は以上である。各時代、各地域において重要な調査成果が現地説明会によって一般公開されている。また、世界考古学会議が、東アジアで初めて京都で開催されたことも特筆されるべきである。

以上にあげた調査成果は、検証の途中であり、最終的な結論は今後の整理作業を含めた検討を待たなければならない。今後の検討に注目したい。

(こいけ・ひろし＝当調査研究センター調査課長)

考古学者・樋口隆康先生と文化財保護

－京都府における遺跡の調査研究と保護を中心に－

杉原和雄

1. はじめに

京都府埋蔵文化財調査研究センター元理事長樋口隆康先生は平成27(2015)年4月2日(木)に逝去された。既に三回忌も経ているがお別れしたことの悲しみは大きく思い出はなお鮮明である。

樋口先生の訃報記事は新聞各紙に大きく報道され、ご縁の深い奈良県立橿原考古学研究所、斑鳩町文化財活用センター等では先生への感謝を込めた追悼行事^(注1)も行われた。

京都府では城陽市歴史民俗資料館において平成28年10月15日(土)から12月18日(日)まで秋期企画展「樋口隆康先生と南山城の古墳－古墳を見つめた熱きまなざし－」と題して追悼展示が開催された。展示にあたってはご遺族の全面的な協力を得て、生前に樋口先生が愛用されたカメラ、巻尺、調査日誌、実測図、調査記録等と共に城陽市内及び南山城で先生が直接発掘調査された古墳関係遺物等が展示された。府内における古墳文化の一大中心地の山城地域を紹介することで先生の大きな足跡を実感し心から先生を偲ぶことが出来る展示であった。樋口先生は城陽市で昭和36年の西山古墳群発掘調査やその後の尼塚古墳群、芝ヶ原古墳群等々でたびたび調査指導をされている。城陽市は文化財保護審議会会長、史跡整備委員会委員長をお願いし、また生前に蔵書の一部を寄贈いただくなど先生とは深い縁があるといえよう。一方、京都府では京都府文化財保護審議会及び京都府埋蔵文化財調査研究センターの副理事長、後に理事長として半世紀にわたってご指導をいただいた。センター設立時に「調査センター」と仮称されていたのに対し研究を重視される立場から「研究」の文字を加えられたのも先生である。

私自身は京都府教育庁の職員としてまた退職後も一貫して調査研究や文化財保護を通して45年間にわたりお世話になった。また昭和63年度城陽市史跡整備計画策定委員会と平成18年度から現在に至る城陽市史跡整備委員会では先生の後押しというご配慮をいただき末席に連なっていたのはたいへん幸せなことであったと思っている。

本稿は平成28年11月19日(土)に私がお引き受けした城陽市歴史民俗資料館主催の講演会「考古学者・樋口隆康先生と文化財保護」、第2部座談会・城陽市歴史民俗資料館友の会工藤香代子氏、城陽市教育委員会小泉裕司氏と私による「樋口先生の思い出を語る」及び平



写真1 京都府埋蔵文化財調査研究センター設立20周年記念特別講演会で開会挨拶される樋口先生
(平成12年10月14日)



写真2 当調査研究センター主催第19回小さな展覧会で展示指導される樋口先生(平成14年8月28日)

の広くて輝かしい来歴については自伝的に著された御著書^(注2)等2冊に詳細があるのでぜひご参照願いたい。

成16年10月3日(日)の第12回京都府埋蔵文化財研究会で先生が特別講演された「京都の文化財と私」のレジュメ原稿等を骨子として、先生を偲び、先生の京都府内における遺跡の調査研究と保護の概要を前期と後期という形でまとめ、先生の大きなご功績を記録しておくことを目的としている。

本誌への寄稿を認められたご遺族と城陽市歴史民俗資料館に感謝すると共に、掲載にあたり労をとられた当調査研究センターの小池寛調査課長にお礼を申し上げたい。なお先生

2. [前期] 樋口先生の京都府内における遺跡の調査研究と保護

樋口先生の記録等から京都府内遺跡との関わりのうち前期はさらに3期に分けることが出来る。まとめるにあたっては遺跡名や所在地、調査年など出来るだけ先生の記録に忠実な表現としたが読者の便を考慮しごく一部の遺跡名に手を加えた。また八幡市石不動古墳については先生の記録に漏れていたが発掘調査報告書に明記されているので追記させていただいた。なおここに掲載した遺跡は先生がすべて現地入りされたものであるが、調査内容は現地踏査・確認から発掘調査まで様々である。昭和25年以降はほとんどが担当者・責任者としてあたられている。市町表記は平成合併後の名称としたが遺跡名には便宜的に旧町名等を冠したものがある。また先生の調査記録は時系列による暦年表記であるが、今の遺跡地図等との照合が容易なように北から地域別にまとめその地域内では調査年順とした。遺跡名に続く括弧書きは昭和をSとして後ろに調査年を記した。遺跡名や市町名の後ろに記した人名は樋口先生が現地調査時にお世話になった地元教員、地方史研究者等の方々である。樋口先生自身が「調査にあたっては地元の遺跡に詳しい人を訪ねてその人の指示や案内を受けて調査した」と克明に氏名を記され、自伝にも「多くの友人が出来た」と述懐されている。埋蔵文化財保護行政の体制が整わない時代に樋口先生と共に府内の遺跡保護に尽力されたことに敬意を表しあえて括弧内に氏名(敬称略)を入れさせていただいた。

(1) 昭和17(1942)年～昭和24(1949)年

京都市 穀塚(S22)、太秦清水山古墳(S22)、天塚(S22)、南日吉町遺跡(S24-松原耐二)

向日市・京都市 寺戸大塚古墳(S17)、妙見山古墳(S22、24)

長岡京市 神足狐塚(S23-中山修一)、八幡市 石不動古墳(S18)、茶臼山古墳(S23)

先生が第一高等学校を卒業し京都大学へ入学されたのは昭和16年、2回生の時に寺戸大塚、3回生で石不動の調査に教室員として参加されたのが京都府内調査の嚆矢である。寺戸大塚、妙見

山では前方部主体部の調査、石不動では豊富な遺物の出土がありいずれも学史を飾る重要な前期の古墳として知られる。

(2) 昭和25(1950)年1～7月

〔丹後〕 宮津市 丹後国分寺西方古墳、小路山古墳、吉祥古墳、与謝野町(糸井一、小室洗心) 岩滝丸山古墳、法王寺古墳、ヤングロ古墳、蛭子山・作り山古墳、白米山古墳、京丹後市(坪倉利正) 峰山町内の23基、網野銚子山古墳、小浜離島古墳、舞鶴市の遺跡(坂根清之)

〔丹波〕 綾部市(塩見先生) 奉安塚、西垣寛氏邸内古墳、以久田野古墳群、京丹波町(片山利男) きもんのもり古墳、曾根何鹿神社古墳、豊田トバ塚、亀岡市 千代川狐塚、辻山古墳、湯井裏山古墳、鹿谷北方山腹古墳、鹿谷大塚、法貴の古墳20基(上島俊一)、篠の古墳30基、

〔山城〕 長岡京市(山村金三郎) 長法寺力池古墳、南原古墳、走田神社境内古墳3基、寂照院の石棺蓋、木津川市 平尾城山古墳・椿井大塚山古墳、天上山古墳、御霊山古墳、井手町 橘諸兄公墳(北大塚)、美怒王(南大塚)、京田辺市 山崎神社古墳、足彦大兄王墳

京都大学講師となられた年に当たり日本考古学協会の日本古墳調査(踏査)事業として京都府内を担当された。7ヶ月にわたり府内全域を対象とした古墳の調査が初めて実施された。戦前に調査され報告された「京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告」等にはない新たな古墳が多数確認された。平尾城山・椿井大塚山がこの時期に調査されているのは注目される。

(3) 昭和26(1951)年～昭和36(1961)年

〔丹後〕 京丹後市 桃谷古墳(S26-坪倉利正、田中光浩)、網野町内遺跡調査(S27-中矢徳治)、網野町岡古墳(S28、29-釋龍雄)、丹後町産土山古墳(S28)、大宮町大田の花横穴(S29)、網野町小浜の縄文遺跡(S30-中矢徳治)、丹後地域の網野・弥栄・峰山各町調査(S31)、弥栄町ニゴレ古墳(S31、33-池辺洋至)、舞鶴市 切山古墳(S26)

〔丹波〕 福知山市 牧弁財天古墳(S30-芦田重治、福井満夫)、稲葉山古墳群(S31-芦田完、S32-中川淳美)、綾部市 以久田野古墳群(S32-永井実、四方竹治郎)

〔山城〕 京都市 石見上里大道石室(S26-山村金三郎)、石作鳥居道石室(S26-山村金三郎)、広隆寺弁天池経塚(S32-上野義輝)、大枝東野町古墳(S29) 山科大宅廃寺(S28)、深草東車塚(S33)、大枝長野新田家形石棺(S27)、福西古墳(S27)、梅ヶ畑大宝寺山古墳(S29)、大北山原の谷町開拓地(S30)、松尾葉室塚(S30)、深草藤森古天皇(S30)、嵐山龍秋和尚墓地(S31)、嵯峨広沢古墳(S31)、山科大宅廃寺(S33)、西寺跡-礎石(S35)、大枝福西古墳(S36)、山科西野山古墓(S36)

向日市 物集女車塚(S28)、長岡宮会昌門(S30-中山修一)、乙訓(勝山)中学校運動場遺跡・向日町周辺遺跡(S31-中山修一) 寺戸長岡寺跡(S31-中山修一)、寺戸大塚(S32-山村金三郎)、長岡京跡京阪神急行開発住宅地(S34)、長岡宮跡鶏冠井祓所出土礎石(S35)、元稻荷古墳(S35)、長岡宮小安殿・大極殿跡(S36)、恵比寿山石剣出土地(S36-袖岡正清)

長岡京市 海印寺村瓦窯(S28)、友岡瓦出土地(S30-中山修一)、長岡京市長法寺マトイ塚(S31)、長法寺七つ塚(S31-袖岡正清)、城陽市 中北石神遺跡(S29-新井辰夫)、久津川箱塚(S



写真3 長岡宮会昌門跡と樋口先生(平成24年8月21日) (公財)向日市埋蔵文化財センター提供

35-臼井史朗)、西山古墳群(S36)、精華町
下狛大福寺古墳(S32-中川稔)、木津川市
椿井大塚山古墳(S28)、和束町 三本柿の
ノ塚古墳(S33)

昭和20～30年代の京都府域では大学の外、
小中高校の先生方が手弁当で遺跡調査をさ
れていた。しかし昭和26年以降は京都府が主
として京都大学考古学教室に発掘調査を依
頼することになった。時の主任教授は樋口先
生を京都府の担当者に指名されたとのことで

ある。昭和36年、京都府教育庁に堤圭三郎氏(故人)が全国で3番目の埋蔵文化財担当技師として
採用されるまで約10年間にわたり、先生が発掘調査を担当し個別遺跡の保存等について指導され
ることになる。

中国製のガラス製耳璫(耳の飾り)が出土した桃谷、網野岡の横穴式石室、舟形や武人埴輪の出
土で知られるニゴレ、切山の前期の組み合わせ式石棺、豊富な遺物の出土で知られる稲葉山、「史
林40-2」に報告された洛西広沢、大枝福西など注目すべき調査がある。乙訓では長岡京解明の
端緒であり記念的な調査としていまも語り継がれる昭和30年の長岡宮・朝堂院会昌門の発掘調査
を中山修一先生と共に実施し、昭和36年には大極殿院の調査が行われた。今日なお調査が連綿と
続く長岡京研究の礎を築かれたのである。樋口先生が長岡京の調査研究に深いつながりがあるこ
とは意外に知られていない。中山修一先生古希記念論集には序文を寄せておられる。晩年の平成
24年長岡京調査60周年記念の年には向日市埋蔵文化財センターの求めに応じ、現地視察と共に長
岡宮初期調査資料の閲覧や貸し出しに配慮され、当時の状況について多くの示唆を与えられた。

久津川古墳群では箱塚、西山古墳群を調査、後者は堤圭三郎氏が京都府に採用された年の調査
で開発調整や発掘資材の準備は堤氏が行ったが現地調査は樋口先生と同志社大学が共同であたら
れた。当時の住宅造成との調整は厳しく、調査期間も限られ樋口先生にとっても苦勞の多い現場
であったと堤氏からお聞きしたことがある。この西山調査では古墳1基を現状保存することで協
議が成立したがその後工事中に破壊される事態となり関係者を愕然とさせた。

先生の南山城での調査で特筆されるのはやはり椿井大塚山古墳であろう。山城の古墳中1、2
位の大きさを占める椿井大塚と久津川車塚は共に明治27年当時の国鉄奈良線の建設工事により前
方後円墳の墳丘が切断され、車塚では石棺が露出したが、椿井大塚山では注意を引くような遺構
等は見られなかった。昭和28年に至り線路の法面拡張工事中に石室や遺物が掘り出され、急遽京
都府からの依頼を受け樋口先生が担当者となり同僚の考古学教室員と共に発掘調査を行った。調
査の結果は墳丘規模、内部主体構造、副葬品いずれを取り上げてもきわめて重要なものであった。
とりわけ卑弥呼の鏡かと議論される30数面の三角縁神獣鏡の出土は学会に大きな衝撃を与え、現
在なお倭国形成論や古墳文化研究における超一級の資料として活用されている。樋口先生はただ

ちに京都大学の学術誌『史林36-3 昭和28年』に「山城国相楽郡高麗村椿井大塚山古墳調査略報」として報告された。調査上のご苦勞は大変だったと思われるが後に古鏡研究の第1人者と評価される先生にとっては得がたい経験だったと推察される。調査を依頼した京都府が出すべきこの古墳の報告書は調査から11年後の昭和39年3月に『京都府文化財調査報告第24冊』として刊行され一部が配布された。しかし昭和40年2月に講談社『群像』に京都大学小林行雄先生が「拜啓京都府知事様」と題して、双ヶ岡売却問題、御土居宅地化、城陽市西山古墳破壊、八幡式部谷銅鐸転売そして椿井大塚山古墳報告書等について京都府の文化財保護行政の不手際な姿勢を指摘された。昭和30年代後半には確かに指摘を受けた事象が連続して起こっており京都府への苦言と受け取ることが出来る。椿井大塚山の報告書については主として「序文」の表記などに問題があるとの指摘であったが知事判断により発行中止となった。この件については樋口先生の自伝や当時の関係者である堤氏の「小林行雄先生追悼録」等々に関連の記述がある。^(注3)私も樋口先生から担当していた古墳の報告書が出ていないことをいつも気にしているとお聞きしたことがある。時を経て平成10年にこの古墳の国史跡指定を目指していた山城町が樋口先生から全面的協力をいただいて山城町埋蔵文化財調査報告書第20集「昭和28年椿井大塚山古墳発掘調査報告」を発行した。もともと昭和39年の報告書も原稿の大半は樋口先生によって執筆されていたが当時の主任教授の名で刊行された経過がある。樋口先生は、当時は教室員が書いた原稿でも主任教授の名で出ることには慣例で有り抵抗感はなかった、そういう時代だったと述懐されていた。山城町の報告書は手元に残されていた旧原稿を元にまとめられたために発掘調査当時の臨場感がありまた正確な報告書となった。この報告書の刊行や史跡指定に多少関わった私としても学史上著名な古墳の報告書が広く配布され利用されることになったことに正直ほっとしたというのが偽らざる気持ちであった。これも樋口先生の文化財保護への執念によるものであり改めて感謝するとともに当時の山城町の英断に敬意を表したい。平成9～10年は樋口先生が指揮された奈良県・黒塚古墳の発掘調査で大量の三角縁神獣鏡が出土した年でもある。椿井大塚と黒塚を合わせて合計約70面の三角縁神獣鏡の調査に先生が深く関わったことになる。また平成12年には椿井大塚山が国指定史跡になっている。先生流に云えば「僕は体が強いのが取り柄、元気で長生きしていたらいいこともあるよ、僕は運がいい」となるが、全くのご謙遜である。

約10年にわたり京都府にも市町村にも文化財担当者が全く配置されていない中、優に50箇所を超える現地調査を担当された樋口先生の足跡はとても大きく、調査された資料等はいずれも考古学研究上今も重要なものばかりである。大学の本務を抱えながらの調査であり超人的な働きぶりであった。その精神力、体力には感動する以外にない。

3. [後期] 樋口先生の京都府内における遺跡の調査研究と保護

ここでは樋口先生の昭和37(1962)年～平成27(2015)年を簡単に振り返りまとめておきたい。

昭和37年以降は日本での発掘調査を担当することはほとんどなく海外調査へ軸足を移された。

昭和36年京都府採用の堤氏は樋口先生の教え子で、採用後の最初の仕事が「京都府遺跡目録昭

和37年刊（遺跡数約1300件）」である。現在、遺跡数は約16000件にのぼるが当時の京都府にとって画期的な事業であり開発との調整の基礎資料が作成された。樋口先生は府の遺跡リストづくりを堤氏にバトンタッチしたと述懐されている。年度後半の作業で6ヶ月のうちに調査から刊行まで行われている。短期間で成し遂げられたのは府内各地におられる教員や地方史研究者のお陰であるがその多くは昭和20年代後半から30年代にかけて現地で樋口先生とともに調査にあたられ、先生が府内の友人とされた方々である。序文にあるように目録作成にあたっては「京都大学考古学教室の絶大なご支援に感謝」とあるように樋口先生や教室員が作成された調査カードがおおいに生かされた。

先生には昭和41年に京都府文化財専門委員にご就任いただいたのを皮切りに、後には京都府、京都市の文化財保護審議会会長、昭和56年に設立された(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターでは副理事長、後に理事長として平成14年まで約20年間お世話になった。昭和58年京都大学退官と同時に京都市左京区にあり久津川車塚出土重文銅鏡を所蔵している泉屋博古館館長に就任された。この後、私たちの連絡、相談等はいつも秘書さんを通してこの館長室をお借りして行われた。年1回開催される京都府埋蔵文化財研究会は府内の文化財担当者と考古学関係大学人で構成されるが、第2回の平成6年には「近畿北部の紀年銘鏡とその背景－青龍三年から正始元年の東アジア」と題して先生が講演され、その後永らく会長をお引き受けいただいた。定説を疑うこと、考古学用語の概念規定をきちんと行うこと、発掘調査報告書の発行とその内容については重い責任があることなどを前置きされた上で、紀年銘鏡の話しを淡々となされたことが印象深く残っている。先生の邪馬台国と三角縁神獣鏡等に対するお考えは1畿内説、2三角縁神獣鏡は魏鏡、3三角縁神獣鏡は同型鏡で大量生産、4倭政権からの配布でなく地方首長が魏との往来で独自に入手－政権は収奪しても与えない、と明瞭に整理されておられる。

久津川箱塚・西山古墳群の発掘調査以来の縁がある城陽市には別宅があり、城陽市文化財保護審議会会長、城陽市史跡整備委員会委員長を務められた。昭和59年には芝ヶ原11号墳について市民の間からも保存要望が起きやや騒然とした中、出土した三角縁神獣鏡と古墳の重要性をアピール



写真4 史跡芝ヶ原古墳でカメラを構える樋口先生
(平成26年5月19日) 筆者撮影

するKBSテレビの番組に樋口先生と市の文化財保護審議会委員柏井光彦さんと私がそろって出演したことも今は思い出である。当時、先生が現状保存を強く語られていたことが印象的である。11号墳は保存できなかったが、幸い保存され最古級の古墳として後に国史跡になった芝ヶ原(12号)古墳については先生が整備委員会委員長として指導にあたられ、平成25年4月古墳公園として公開された。整備委員会は芝ヶ原に引き続き史跡久津川車塚古墳を新たな対象として継

続されている。先生は平成27年3月10日(火)の第22回委員会をこの委員会としては初めて欠席された。その日の議題は車塚古墳の整備基本構想の検討と前方部西側に敷設された造り出し部の発掘調査状況の視察であった。整備委員会として初めての発掘現場という節目であり、壮大な作り出しとその後が発掘されたくびれ部の整美な葺き石等をご覧いただくことが出来なかったのは口惜しい限りである。先生は整備委員長のまま4月2日に亡くなられ、今は私がその後任を務めさせていただいている。

4. むすびに

私は京都府立丹後郷土資料館に勤務した昭和45年から城陽市史跡整備委員会まで約45年に渡り折に触れご指導を得たことになる。資料館の「経塚展－丹後とその周辺－」に伴い京都大学の遺物をお借りした際にはこれはおもしろい資料だねとお話しされながら借用予定品のすべてを大型カメラで撮影されていた。府埋蔵文化財調査研究センターでは府内の調査現場をはじめ景初四年銘鏡出土古墳や丹後の徐福伝承地(京都府伊根町新井崎神社)等々府内各地の現地視察に同行させていただき、幸い車中で諸々の楽しい話や有意義な話をお聞きした。日本の狭くて暗い研究室よりは海外調査が性に合っている、朝は5時起きして車を洗車して信州から取り寄せたそばの朝食から一日が始まる。私の家内はギリシャやローマの歴史については私より遙かに勉強していて詳しいなどご家庭の話もお聞きしたことがある。カメラと車の運転がお好きで、風貌はオシャレ、身につけているジャケットやネクタイなどいつも垢抜けしていてスマートであった。

平成元年70歳の時に奈良県立橿原考古学研究所長に就かれてからは泉屋博古館長との併任となられ日曜日以外は仕事をされていた。多忙な中、海外調査は負担ではとお尋ねしたときには海外は全く苦にならない、最近はペットボトルが出来て楽になったよと話され、実際軽々と海外へ赴き帰国翌日には国内の仕事をされていた。京都府でも海外調査に参加することを考えてはとか、あるいは橿原考古学研究所附属博物館リニューアル式典では展示場で京都府でも丹後郷土資料館のリニューアルを考えていかねばねなどと直接叱咤していただいたことも多々ある。

先生が京都府の審議会、理事会で常々云われていたのは「文化財や遺跡はできるだけ後世に残さなければならない」ということであり府の関係機関が調査した遺跡について、これは保存出来ませんかと毎回質問されていた。現状保存が困難なことを理解されながらのご発言だったが、京都府では文化財の中で埋蔵文化財は冷遇されているともよく言っておられた。調査研究と保存を同時並行で常に思考される方であった。先生の保護理念を一番忠実に守られたのはほかならぬ教え子の堤氏であることは周知の事実である。京都には大学が多く行政も先生方に頼りやすい環境にある、特に埋蔵文化財の世界では戦前から昭和30年代まで全面的に頼っていた。他府県に較べて恵まれていたといえよう。反面、大学の先生方に甘えすぎともいえる。

樋口先生の海外調査研究は戦前の朝鮮半島楽浪古墳(S17)や高句麗古墳を端緒として、その後、中国各地や西域・敦煌、インド、イラン、アフガニスタン、パキスタンの調査隊に参加。第1～第6次京大中央アジア学術調査の隊長としてバーミヤン、スカンダル、ティリアテペ等々を調査。

平成12年にはシリアパルミラ地下墓修復の記念式典に出席された。これらの海外活動からシルクロード考古学の第一人者ともいわれる。世界遺産アフガニスタンのバーミヤン石窟大仏の破壊、同じくシリアのパルミラ遺跡一部破壊などについては心を痛めておられたが、樋口先生の写真や野帳等はかけがえのない貴重な記録として今後も注目され生かされることであろう。これら海外調査の評価は筆者には出来ないので、別途しかるべき研究者にお願いしたいと思う。

考古学にとどまらない広い視野・行動、司馬遼太郎や井上靖など著名人との交流があり、おおらかでさわやか、自然体で謙虚、率直、後輩には強制がなく自由な生き方を勧められた。細かいことにはこだわられなかったが、私などが抜き刷り等をお送りするとハガキですぐさまお礼状をいただくなど筆まめな先生であった。世界と日本、中央と地方の視点が明確だった。穏やかではあるが調査研究や文化財保護への真剣なまなざしとご発言は終生変わることがなく、たとえば京都^(注4)といった地域の文化財保護の大切さを常に強調された。調査研究は文化財保護の基礎といわれいつも調査研究を保護につなげる方であった。

樋口先生は学閥意識の薄いかたで出身大学を問わず寄ってくるものには指導の労を惜しまれなかった。私などは教え子でもなく一介の府職員であったがいつも気さくにご指導いただいた。

私が京都府教育庁を退職後に10年近く務めた大学をやめたときにご挨拶すると「これからは地域の文化財を保護する仕事に専念して欲しい」とのお言葉をいただいた。私への年賀状にはいつも「地域文化財を守りください」「そして楽しく暮らしましょう」と書かれていた。

私は今、先生が京都府埋蔵文化財研究会の会長を引き受けられた時とほぼ同年齢である。

先生のご遺志を胸に今後も文化財保護に努めていくことがせめてもの恩返しになるのではと思っている。ほぼ半世紀にわたり京都府や私たちがご指導いただきお世話になったことに心から感謝申し上げ、むすびとさせていただきたい。心からご冥福をお祈りします。

(すぎはら・かずお＝元京都府教育庁指導部理事・文化財保護課長、
元当調査研究センター常務理事・事務局長)

注1 平成27年5月29日～6月30日写真展「樋口隆康先生と歩んだ日々」と5月31日「樋口隆康氏を偲ぶ講演会」が奈良県立橿原考古学研究所で開催された。泉森皎、宮原晋一、水野敏典、菅谷文則等の所員及び斑鳩町教育委員会の平田政彦氏が講演され約250人の聴衆とともに先生を偲ばれた。平成28年5月28日～7月3日 展覧会 斑鳩町文化財活用センター「樋口隆康展－戦後の日本考古学の歩みとともに－」教え子の都出比呂志先生が「樋口隆康先生から私が学んだこと」として講演された。

注2 樋口隆康『シルクロードから黒塚の鏡まで』学生社 1999 「京都の文化財保護」の項がある。

岩尾清治『樋口隆康聞書 実事求是 この道』西日本新聞社 2001

注3 注2の2冊の自伝にもその経過について淡々と記されている。『小林行雄先生追悼録』1994、また角田文衛編『考古学京都学派』雄山閣 1994 には沢沢味光氏が「梅原末治論」のなかでかなり詳しく紹介をされている。田中琢『倭人争乱』集英社 1991 p196～198にも経緯が記載されている。

注4 樋口隆康、堤圭三郎、浪貝毅、高橋美久二『京都考古学散歩』学生社 1976

有畦式平窯の成立について

石井清司

1. はじめに

かつて私は、京都府と奈良県にある奈良山瓦窯群における瓦専業窯の構造変化を検討し、飛鳥・藤原京期から続く^(注1)窖窯構造の瓦専業窯から平窯構造の瓦専業窯への変遷過程を検討した。^(注2)わが国において、5世紀中頃以降、これまでの素焼きの焼き物から丘陵斜面を利用した構築窯(窖窯)で、硬質で水もれの少ない焼き物(須恵器)を焼成し、崇峻元(588)年、本格的な寺院である飛鳥寺の造営を契機として瓦生産が開始される。当時の瓦は須恵器焼成窯で、須恵器とともに瓦を焼成した瓦陶兼業窯が多く、本格的な都城である藤原京造営以降、瓦をもっぱら焼成する瓦専業窯へ変わる。瓦専業窯は、燃焼部と焼成部の境に高低差がある階を設け、焼成部床面には生瓦を据えやすくするために段を設けるようになる。そして平城京造営以降、瓦専業窯ではこれまでの窖窯構造から平窯構造が採用されるようになる。

平窯は、焼成部が方形に近い平面形態で、これまでの窖窯の焼成部床面傾斜角30°程度から10°^(注3)程度に変化し、階部分から奥壁までの奥行(長さ)が長い窖窯から、奥行を短くし、幅を広げて方形に近い焼成部に変化する。また、焼成部幅を広げるために階部分に分焰柱を据えるようになる。平窯は、焼成部床面が平坦な無畦式平窯から、粘土や瓦を利用した畦を設ける有畦式平窯へと変化し、平安時代には官窯の瓦専業窯として有畦式平窯が定着するようになる。

この瓦専業窯の変化を窖窯構造の窯Aタイプから、奥行を短くして分焰柱を設けた窯Bタイプ、外来技術を色濃くもつ窯Cタイプ、有畦式平窯の窯Dタイプに分けて、その変遷過程を奈良山瓦窯群の窯構造で検討した。

この有畦式平窯(窯Dタイプ)の成立については、「窯Bタイプあるいは窯Cタイプを改良して日本で独自に造りだされたものか、朝鮮半島あるいは唐代の瓦窯や土器窯を模倣したものかは明らかではない」と前考では結論づけた。以後、有畦式平窯の成立過程を、私自身の課題として残っていたが、ひとつの提案として本論をまとめた。

2. 有畦式平窯の定義と窖窯構造からの変化

有畦式平窯は、「①焼成室と燃焼室の境に隔壁をもち、②その手前が階となる。③燃焼室と焼成室は、床面がほぼ平坦で、燃焼室は小さな焚口から隔壁へ向かって幅が広がる。④焼成室は平面が方形で、⑤床面に数本の畦を設ける。⑥隔壁には複数の通炎孔をあけ、そこを通った炎は、⑦この畦と畦の間を通る」で、「軟質の瓦を強い還元炎で焼成することに特化した構造」と位置づけている。^(注4)②の階は窖窯構造で、最古期の瓦窯と位置づけられている飛鳥寺瓦窯であり、瓦窯では早い段階から造られている。①の隔壁の契機となったものが一本の分焰柱の考案から始まったと考えられている。^(注5)一本の分焰柱の例としては藤原宮付属瓦窯の大和三堂山瓦窯があるとの指



第1図 奈良山丘陵の瓦窯分布図

- | | | | | |
|-----------|----------|----------|----------------|----------|
| 1. 梅谷瓦窯 | 2. 瀬後谷瓦窯 | 3. 市坂瓦窯 | 4. 五領池東瓦窯 | 5. 歌姫瓦窯 |
| 6. 音如ヶ谷瓦窯 | 7. 歌姫西瓦窯 | 8. 山陵瓦窯 | 9. 奈良山51-52号瓦窯 | 10. 押熊瓦窯 |
| 11. 乾谷瓦窯 | 12. 得所瓦窯 | 13. 中山瓦窯 | | |

摘もあるが、奈良山瓦窯群では一本の分焰柱が採用されるのは、平城宮瓦編年第Ⅱ期の梅谷瓦窯、押熊瓦窯、山陵瓦窯がある。階部分に一本の分焰柱を据えることで、燃烧部からの焰が焼成部前面で左右に分けることができ、窯の中央部だけでなく、側壁へも焰があたるようになる。その分焰柱の存在によって、④これまでの窖窯構造の焼成部は幅が1 m前後で、奥行が5 m程度のものから、焼成部幅を1.5倍程度広げ、奥行を短くして方形に変化する。

須恵器焼成の窖窯は、その焼成する製品の器形・法量が多彩であるが、瓦専業窯は丸・平瓦、軒瓦、塼など器形・法量に企画性があり、かつ須恵器焼成温度に比べて低温度での焼成が可能であることから、窯入れの作業と燃烧効率を考へて焼成部の平面を方形に近づけたと考えられる。

窖窯構造の焼成部床面は、燃烧部から煙道部に向かって床面傾斜角30°程度となっているため、生瓦を据えやすくするために、地山を削り込んで階段状に成形したもの(窯A1タイプ)と窯の主軸に対して直交に粘土塊あるいは瓦を据えて階段状に成形しているもの(窯A2タイプ)があり、いずれも生瓦が据えやすいように各段間を30cm程度の間隔を空けて造っている。

奈良山瓦窯群では、一本の分焰柱をもったと思われる梅谷2・3号窯、押熊瓦窯、山陵Ⅱ号窯は、瓦専業窯として窖窯構造から平窯構造に変化する過程で考案されたもので、窖窯と平窯の折

表型のような窯体構造(窯Bタイプ)で、焼成部床面を傾斜角10度程度と緩く造っている。^(注6) 窖窯構造の窯は、須恵器窯あるいは瓦陶兼業窯で多く採用されているもので、須恵器の場合、焼成温度を1,100℃前後で焼きあげる必要があり、焼成部を細長くすることにより、焼成部が煙道の役割をなして、燃焼部からの焰が奥壁に向かって流れるように傾斜を持たせて造られている。

平城京造営に係る奈良山瓦窯群は、瓦陶兼業窯でなく、瓦をもっぱら焼成する瓦専業窯が造られるが、瓦の場合、須恵器に比べて低い焼成温度で焼き上げることが可能となる。また、宮域の造営には多量の瓦が必要であり、燃焼時間やその材料であるマキを効率よく使用するために窯体構造の改良が行われたと思われる。窯Bタイプは焼成部床面の傾斜角が緩いため、窯Aタイプのように階段状に成形することも、焼き台を据えることもない。藤原京期では確認されていないが、平城京期の中山瓦窯、歌姫西瓦窯(窖窯構造の窯Aタイプ)では、焼成部奥に複数か所の排煙孔を設けた障壁^(注7)があり、窯Bタイプでもこの後面隔壁(これまで奥壁に通煙孔をもつ構造)がある。

大川清は、「瓦窯の形態と年代」という項目を立て、窯体の構築方法による地下式と地上式に区分し、「焼成室及び焼成部の底が登る勾配」の登窯に対して、平窯を「ほぼ平らなもの」^(注8)という概念規定し、平窯は焼成部床面の構造で無牀(畦)式と有牀(畦)式に区分している。

無牀式(無畦式)^(注9)平窯の例として、大川は日高山瓦窯跡(日高山4号窯)、石見国分寺瓦窯跡を上げている。近年の調査例では京都府木津川市梅谷6・7号窯^(注10)、同井手町石橋瓦窯^(注11)がこの分類にあてはまり、焼成部の大半が後世に削平されていた中山51号窯^(注12)もこの区分に含まれる可能性がある。石井分類では窯Cタイプとしているもので、焼成部床面に畦を設けるものが有畦式平窯(石井分類の窯D)となる。

無畦式平窯の焼成部床面は平坦で、平坦な床面に生瓦をそのまま据えている。燃焼部からの焰は、階部分と窯入れされた生瓦が障壁となって上昇し、焼成部の天井部にあたって焼成部内の雰囲気(空気)を高める窯体構造で、階部分には一本の分焰柱や複数本の分焰柱からなる前面隔壁はなく、焼成部床面での火の回りは悪かったものと思われる。無牀(畦)式平窯は大川清も指摘しているように、その源流を中国、朝鮮半島でもその出土例があり、近似したものとしては亭岩里瓦窯などがある。私は、石井分類の窯Cタイプは中国・朝鮮半島からの技術指導を受けて成立したもので、その技術指導とは別に、わが国独自に、須恵器の窖窯構造から改良を重ねた結果、窯Bタイプが生まれ、窯Bタイプに窯Cタイプをさらに改良した結果、日本独自の有畦式平窯(窯Dタイプ)に変化したものと想像していた。

3. 中山瓦窯(S Y 340号窯)からの発想

奈良市中山瓦窯は1972年に発掘調査が行なわれ、奈良時代初頭から前半(平城宮瓦編年の第Ⅰ～第Ⅱ期)にかけての平城宮所用瓦を焼成した官窯であり、7か所、10基の窯が存在していた。以後、発掘調査はなかったが、2014年、新たに3基の窯の発掘調査が行なわれ、その概要も報告されている。^(注14) 新たに発掘調査された瓦窯はいずれも窖窯構造で、特に瓦窯S Y 340は、焼成部が床面傾斜角11.5度で、操業当初には段を設けて焼き台とし、最終操業時には窯の主軸に直交する

ように、主に半裁した平瓦を利用して、およそ30cmの間隔で10列以上の段を設けている。

S Y340号窯では、窯体内に焼成された製品が残っていないため、生瓦の窯入れ、据え方の状況は明らかではないが、焼成部に狭端面を下にして生瓦を据えるとすれば、床面傾斜角を考えて、焼き台としての機能から、半裁した平瓦を積み上げて段を設けている。燃焼部からの焰の動きを想定すると、焰は焼成部床面を這って煙道部に向かうのではなく、焼成部天井や生瓦と側壁の間をぬって昇る、倒焰式あるいは横焰式のものである。

中山S Y340号窯の焼成部の段は、主に半裁した平瓦を4段程度積み上げて形成されている。このS Y340号窯の平面図・写真図版をみると、窯の主軸に直交するように造られた焼成部の段を、90度振り変えて、窯の主軸に平行して据えれば、有畦式平窯の畦となるのでは、と考えた。これまでの窖窯構造の焼成部床面は、床面傾斜角度が高く、窯の主軸に平行するような焼き台を設置することは困難である。一方、床面傾斜角が水平に近い平窯は、窯の主軸に平行するように畦を形成することが可能となる。また、床面と生瓦が密着する無畦式平窯による燃焼効率の悪さを改善するために、これまでの焼き台を窯の主軸に平行するように設置し、燃焼効率を高め無畦式平窯から有畦式平窯への変化であり、無畦式平窯の平坦な焼成部床面に窖窯構造の焼き台を改良して設置したものが、有畦式平窯になると考えた(第2図)。

4. 無畦式平窯から有畦式平窯へ

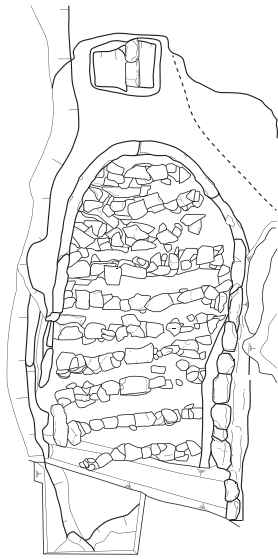
焼成部床面傾斜角が15度以上の窖窯構造は、瓦を焼成するために粘土あるいは瓦を利用して、窯の主軸に直交するように焼き台を据えているが、この焼き台をそのまま90度振って窯の主軸に併行するように焼き台(畦)にしたものが有畦式平窯になるという発想で、有畦式平窯の成立を考えると、有畦式平窯の特徴である燃焼部と焼成部の前面隔壁^(注15)の成立も自然と理解できると考えた。

窖窯構造の瓦窯で、窯の主軸に平行するように数条の溝を焼成部に掘り込んだ例は、栃木県佐野市町谷5号窯(下野国分寺関連瓦窯)、福島県会津市居合1号窯、鹿児島県川内市鶴峯1号窯(薩摩国分寺創建瓦窯)などが知られているが、近畿地方ではその調査例はない。

窯は燃焼部からの焰を焼成部内にできるだけ均等に回すことが必要である。無畦式平窯では平坦な床面に生瓦を据えるために、床面と生瓦が密着しており、燃焼部からの焰が奥壁に届きにくく、燃焼部からの焰は天井部あるいは側壁と生瓦の隙間を縫って煙道部へ届く。一方、床面に主軸に併行するように設けた有畦式平窯の畦は、畦と畦の間の谷部に焰が這って奥壁に至るようになり、無畦式平窯に比べて少ない燃焼(マキ)で効率よく焼成できる。

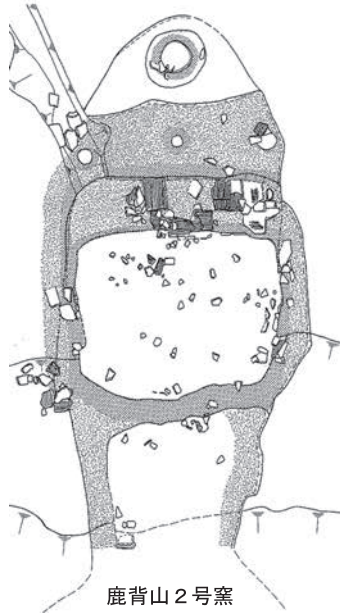
焼成室は複数の畦を設けることによって、その畦と畦の間の谷部に焰が通ることが可能となるが、この焼成室^(注16)の床面改良に連動して前面隔壁が造られるようになる。前面隔壁は、複数本の分焰柱を据え、分焰柱と両側壁、分焰柱間の間が通焰孔となる。通焰孔の大きさは幅25～35cm、高さ30～40cm程度で、下面は階の傾斜部にあり、通焰孔の上面は粘土あるいは瓦を利用して積み上げており、天井部まで届いている。奈良時代前半には窖窯構造で、燃焼部と焼成部の境に1本の分焰柱を据えた瓦窯が生まれるが、この燃焼部からの焰を分ける1本の分焰柱から、複数の

窖窯（窯Aタイプ）



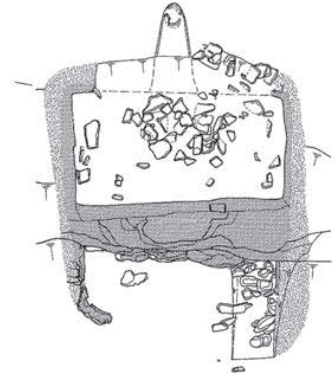
中山S Y340 号窯

窖窯を平窯構造に改変



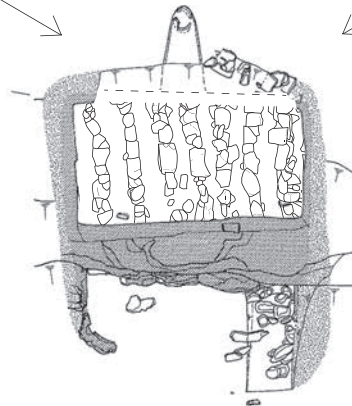
鹿背山2号窯

平窯



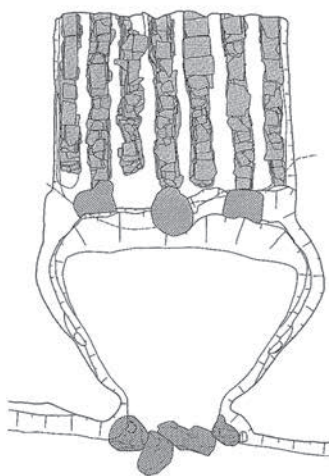
鹿背山1号窯

鹿背山1号窯焼成室は現状保存のため上面輪郭の検出で調査を終了

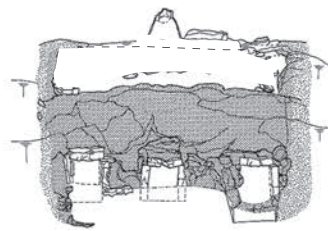


鹿背山1号窯の焼成室に中山S Y340 号窯焼成部焼台を90°回転させて合成したもの

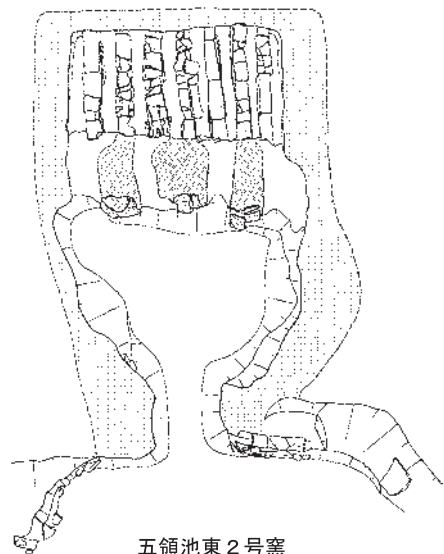
定形化した有畦式平窯
（窯Dタイプ）



市坂8号窯



鹿背山1号窯の
全面隔壁立面図



五領池東2号窯

第2図 瓦窯変遷模式図

狭い通焰孔を通して焰を分散させるための構造が前面隔壁で、燃焼室からの焰は側壁にあたる焰と畦と畦の間に谷部を這って奥壁に至る。

前面隔壁を構成する複数本の分焰柱は、焼成室に設けられた複数本の畦のなかでも、側壁から偶数の畦(2本目・4本目など)の前面に設置されるのが、有畦式平窯成立当初の基本設置か所であると考えている。^(注17)

5. 鹿背山瓦窯から市坂瓦窯へ

平城京への瓦供給を目的として造られた奈良山瓦窯群では、13窯跡、50基の瓦窯を確認している。そのうち、平城宮瓦編年の第Ⅱ期の軒瓦が出土した瓦窯に鹿背山瓦窯^(注18)がある。

鹿背山瓦窯は、平成18年に瓦窯の実態を明らかにするために22か所のトレンチを設定して発掘調査を実施したところ、丘陵南側斜面に設けた14・15トレンチで2基(鹿背山1・2号窯)の瓦窯を検出した。また、瓦窯に近接した丘陵裾部に設けた1トレンチでは2か所の灰原を検出した。1トレンチで検出した灰原は、トレンチ東端と東端から14m西側のトレンチ中央部の2か所で検出しており、東端の灰原は南北5m、東西4mの範囲にあり、中央部の灰原は1.5mの範囲で検出のみであった。14・15トレンチと1トレンチは繋がっていないため、2か所の灰原が1・2号窯のいずれの灰原から特定できていない。また、瓦窯および灰原とも現地調査段階で、現状保存する方向で協議が進み、瓦窯と灰原の関係や灰原内の遺物も表層で確認したのみである。

小規模調査での調査成果によると、灰原表層出土遺物には平・丸・軒瓦がある。軒瓦は平城宮6685型式・重弧文・重郭文軒平瓦、平城宮6135型式・有心の重圈文軒丸瓦で、平城宮瓦編年の第Ⅱ-2期にあたる。平瓦は一枚作りである。鹿背山1・2号窯の先後関係は明らかでないが、窯体構造の特徴から2号窯が1号窯に先行するものと思われる。

鹿背山2号窯は全長5.8mで、築窯当初(仮称2a号窯)は窖窯と思われ、焼成部の奥には壁を設けた後面隔壁があり、後面隔壁の背後0.5mに煙出し穴を1か所設けている。焼成部の奥行(長さ)は約2.3mで、焚口から後面隔壁までの奥行は4.9mを測る。2a号窯の焼成部のみを改変したものが2b号窯である。鹿背山2b号窯の焼成部は方形を呈し、焚口から4.0mの位置に後面隔壁があり、焚口から1.2mには焼土の堅緻・色調の相違するか所があり、前面隔壁が存在したものであると思われる。鹿背山2号窯のように焼成部を改変した瓦窯に山陵Ⅱ・Ⅲ号窯^(注19)がある。

鹿背山1号窯は、残存長2.9mで、焚口部分は後世に削平されている。窯構築に際しては窯壁よりも一回り大きな掘形を掘り、粘土を用いて壁を構築している。奥壁の背後0.4mの位置に1か所の煙出し穴があり、奥壁(後面隔壁)には排煙孔があると思われるが、焼成室内の調査が及んでいないため、その詳細は明らかでない。また、焼成室床面に畦が存在したかどうか不明であるが、近似した窯体構造の瓦窯である兵庫県^(注20)鹿谷2号窯、兵庫県^(注21)碓岩南山瓦窯では、焼成室には粘土と瓦で積み上げた畦を設けている有畦式平窯である。鹿背山1号窯の燃焼室と焼成室の境には上面幅約0.5mの前面隔壁がある。前面隔壁は塼(あるいは日干しれんが)を使用して鳥居形に組んだ通焰孔が3か所あり、通有の有畦式平窯に近似している。定型化した有畦式平窯

では奥壁に排煙施設は無いが、1号窯では奥壁背後に1か所の煙出し穴があり、奥壁には後面隔壁と排煙孔があるものと思われる。

市坂瓦窯は、瓦工房に伴う大型建物群の検出した上人ヶ平遺跡の南側谷部に構築された瓦窯であり、現状保存を前提とした小規模調査で8基の瓦窯を確認し、そのうち、窯体構造を明らかにするために瓦窯2基(2・8号窯)の調査を実施した。^(注22) 谷部の北側斜面に構築された2号窯は全長3.6mを測る有畦式平窯で、窯本体は地山を掘り込んで構築されている。焼成室側壁は掘形を設けることなく、掘り込まれた地山に粘土を貼り付けて造られており、その規模は奥行(長さ)1.4m、幅2.0mを測る。焼成室床面は7条の畦と、畦の2・4・6の偶数畦には燃烧室からの焰を分散するための分焰柱が3本、規則的に配置されている。焼成室奥壁には鹿背山1号窯のような排煙孔はなく、奥壁が床面からそのまま立ち上がるもので、排煙施設は焼成室の上方に設けられた仮設の天井部に存在したものと思われる。^(注23) 市坂8号窯も2号窯と同様の窯体構造で、地山を掘り込んで焼成室を構築するとともに、分焰柱も地山を成形して築かれている。焼成室床面には7条の畦で、分焰柱は畦の偶数畦に接して造られている。

限られた範囲の調査ではあるが、市坂瓦窯では平城宮瓦編年第Ⅳ－1期の6130A、6133A・B・C型式と6138系の軒丸瓦、6732A・C、6718A、6768D型式の軒平瓦^(注24)が出土しており、軒丸瓦6130A型式は平城宮瓦編年の第Ⅳ－1期をやや遡る可能性がある^(注25)と指摘されている。

6. 五領池東瓦窯と音如ヶ谷瓦窯

市坂瓦窯の南東30mの位置に五領池東瓦窯があり、市坂瓦窯で焼成された製品が混入されていることから、市坂瓦窯に先行して操業されて可能性が高い瓦窯である。^(注26) 五領池東瓦窯は3基の有畦式平窯からなり、1・2号窯は東西方向に10m離れた位置で、主軸を揃えており、連立して操業された可能性が高く、3号窯は窯の主軸を異にし、2号窯から20m離れた位置にある。^(注27)

1号窯は全長3.6m・焼成室長1.2m・幅2.1m、2号窯は全長4.0m・焼成室長1.1m・幅1.9m、3号窯は全長3.7m・焼成室長1.2m・幅2.0mで、焼成室床面には7条の畦を有する1・2号窯と8条の畦を有する3号窯がある。分焰柱と焼成室畦の関係と見ると、1号窯は7条の畦で、2・4・6番目の畦に接するように3本の分焰柱が接して据えられている。^(注28) 2号窯は7条の畦で分焰柱の円柱が太く仕上げたためか、東側壁から4本目を基本としつつも、5本目に近い部分にまで及んでいる。3号窯は8条の畦で分焰柱は太く、東壁から2本目と3本目に架かる東側分焰柱があり、中央の分焰柱は東側壁から5本目に接しているものの、東側4本目の畦に近い位置にある。西分焰柱は太く、7本目に接しているものの6本目に近づいて据えられている。

窯体の壁・分焰柱は瓦を補強材として粘土を使用しているが、その瓦と粘土の使用率を比較すると、1号窯と2号窯では隔壁と分焰柱のみ瓦と粘土を積み重ねているが、3号窯では奥壁を除くすべての窯壁に粘土と瓦を積み重ねており、瓦の使用頻度が1・2号窯に比べて3号窯は高くなると指摘されている。^(注29) 五領池東瓦窯では、6133Aa、6138A・B・F・I型式の軒丸瓦、6714A、6716A、6767A、6768A・B・C・D、6732Fb・J型式の軒平瓦が出土しており、6133Aa軒

丸瓦、6732Fb軒平瓦は窯の上層から、6138A軒丸瓦、6714A、6716A軒平瓦は窯の構築材として使用されている。他の軒瓦は五領池東瓦窯で焼成された製品で、光明皇后の一周忌に造営(天平宝字三・四年)された法華寺阿弥陀浄土院に供給されたと考えられる。

2号窯の燃焼室の東壁の構築材として使用された6714A・6716A軒平瓦と同型式の軒平瓦を焼成した窯として音如ヶ谷瓦窯^(注30)がある。音如ヶ谷瓦窯は、五領池東瓦窯の北西方向約1.8kmにあり、光明皇后が皇后宮をもって造営された法華寺本体所用瓦^(注31)を焼成した瓦窯^(注32)で、4基の瓦窯のその前面に瓦工房と思われる小規模建物群がある。窯4基のうち、Ⅲ・Ⅳ号窯の焼成室は後世に削平されており、燃焼室のみを確認し、Ⅰ・Ⅱ号窯は燃焼室・焼成室を含めて遺存していた。なお、担当者は窯をA期とB期に分け、先行するA期の窯としてⅢ・Ⅳ号窯を、後出するB期の窯としてⅠ・Ⅱ号窯を位置づけている^(注33)。

遺存しているⅠ号窯の焼成室には8条の畦と各畦の先端に接するように8本の分焰柱が据えられている。燃焼室は6714A軒平瓦を持ち送ってアーチ状の天井部を構築している。Ⅱ号窯の焼成室には6条の畦と4本の分焰柱が据えられている。Ⅲ・Ⅳ号窯は焼成室が削平されており、その構造は不明であるが、Ⅲ号窯の燃焼室床面の炭火層中から6716A軒平瓦が出土している。

五領池東2号窯の構築材として使用された6714A・6716A軒平瓦がⅠ・Ⅱ号窯で焼成された可能性もあるが、音如ヶ谷Ⅰ号窯で構築材として使用された6714A軒平瓦とⅢ号窯の燃焼室で出土した6716A軒平瓦から、焼成室が削平されたⅢ・Ⅳ号窯で6714A・6716A軒平瓦が焼成されていた可能性が高いと考えられる。そして畦と分焰柱の配置状況から、音如ヶ谷Ⅰ・Ⅱ号窯は五領池東1・2号窯ではなく、五領池東3号窯に近い構造のものと思われる。

7. 有畦式平窯の構造変化

鹿背山瓦窯では、窖窯構造に近い2a号窯があり、その焼成部を方形に改変した2b号窯がある。鹿背山1号窯は2号窯とは異なり、2本の分焰柱と3か所の通焰孔からなる有畦式平窯の要素である前面隔壁を設け、焼成室は方形を呈している。焼成室床面までの調査には至っていないが、床面に畦を設けた有畦式平窯となる可能性が高い。1号窯の焼成室から50cm程度離れた位置に1か所の排煙孔があり、数や位置は不明であるが、焼成室奥壁からの1か所の排煙孔に繋がる排煙施設があると思われる。なお、前述のように鹿背山1号窯に似た有畦式平窯で、奥壁に排煙施設がある瓦窯に奈良時代後半から平安時代の兵庫県加東市掎鹿谷2号窯、9世紀後葉以降のたつの市碇岩南山瓦窯がある。掎鹿谷2号窯の奥壁(後面隔壁)には、焼成室の中央と両側壁の延長部に3穴の排煙孔があるが、最終時のものではなく、奥壁には排煙孔はないと判断されている。碇岩南山瓦窯の排煙孔は焼成室床面・畦よりも上にあり、畦と畦の間の谷部からの焰がそのまま排煙孔から抜けない位置に設置されている。

奈良山瓦窯群のなかの市坂瓦窯は、平城宮瓦編年の第Ⅳ期、平城還都後の大膳職などへ瓦を供給した瓦窯であり、2・8号窯の焼成室には7条の畦と前面隔壁が、焼成室奥には排煙孔がなく、仮設の天井部に排煙孔を設けている。ただ、窯全体は地山を掘り込んで構築されており、燃焼室・

焼成室の側壁は掘り込まれた地山に粘土を貼り付けて造られている。五領池東瓦窯では市坂瓦窯の窯構造に近く、7条の畦を偶数畦に接するように分焰柱を設置するものが古く、新相の3号窯では焼成室床面の畦が7本から8本へとなり、分焰柱の位置も微妙に変化している。

五領池東瓦窯とは軒瓦の関係から先行する時期の音如ヶ谷瓦窯があるが、残念ながらⅢ・Ⅳ号窯の焼成室が削平されており、その構造は明らかではないが、新相と思われるⅠ・Ⅱ号窯はこれまでの7本の畦で偶数畦に接して分焰柱を設けるものではなく、五領池東瓦窯の新相である3号窯に近い構造となる。ただ、出土した軒瓦では音如ヶ谷瓦窯から五領池東瓦窯への瓦範、製品の移動が考えられているが、窯構造から変遷を見ると、鹿背山2a号窯(窖窯)→鹿背山2b号窯→鹿背山1号窯→市坂2・8号窯(音如ヶ谷Ⅲ・Ⅳ号窯)→五領池東1・2号窯→五領池東3号窯・音如ヶ谷Ⅰ・Ⅱ号窯へと変遷したものと考えられる^(注34)。

8. おわりに

須恵器焼成窯を祖形とし、藤原京造営時に多量の瓦を供給する必要性から、瓦専業窯が造られる。平城京では前半期に窖窯構造の瓦窯から平窯構造へと変わり、後半期には有畦式平窯が成立する。平城京への瓦供給を目的とした奈良山瓦窯群は官窯であり、平安京造営に際しては官窯で成立した有畦式平窯が定着するようになる。これまで私は、この有畦式平窯を朝鮮半島、中国からの影響を受け、新たに採用された窯構造であると考えていたが、奈良山瓦窯群での窯体構造を検討することによって、焼き台として使用された焼成部床面の段を、平窯では火の回りを良くするために新たに畦を設けるようになる。その床面構造変化に合わせて焼成部を一本の分焰柱から複数本の分焰柱からなる前面隔壁に変わり、瓦焼成に特化した窯構造へと日本独自で変化する。都城を中心とした瓦窯は、多量の瓦を少ない燃料(マキ)で効率良く瓦を焼成する窯へと変化していくが、その技術改良は渡来人の知識人の指導のもとに窯構築工人が試行錯誤の経て改良されたもので、その工夫の中で生まれた窯体構造が有畦式平窯であると考えられる。

(いしい・せいじ＝当調査研究センター調査課調査第2係総括主査)

注1 かつては登窯と呼ばれていたが、近世の連房式の登窯などとの混同を避けるために窯業用語の窖窯を使用されるようになっている。吉田恵二「窯」(『日本考古学事典』三省社)2003

注2 石井清司「瓦専業窯の成立」(『龍谷大学考古学論集Ⅱ－網干善教先生追悼論文集－』龍谷大学考古学論集刊行会)2010

注3 かつて窯Aタイプを登窯と呼称されていたが、ここでは文化庁手引きに準拠して窖窯と表記し、平窯は大川清の定義(大川清『日本の古代瓦窯(増補版)』『雄山閣考古学選書3』雄山閣1980)に従って、焼成部床面がほぼ平坦なものとする。

注4 「第1節 窯業遺跡 F瓦窯」(文化庁文化財部記念物課監修『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』)2013 番号は筆者が追記。

注5 毛利光俊彦は焼成部の温度をむらなく、しかも効率良く保つため、築窯の簡便さ、瓦の量産を考慮して平窯が生まれ、分焰柱の工夫から有畦(畦)式平窯へと変化していく過程を述べた。

毛利光俊彦「近畿地方の瓦窯」(『佛教藝術 特集古代寺院の生産遺跡』第148号 毎日新聞社) 1983

注6 この形態の窯は大川清分類では無牀式平窯の範疇に入る可能性がある。

注7 筆者は後面隔壁と呼称しているもので、有畦式平窯の隔壁を前面隔壁と呼称している。

注8 大川清『日本の古代瓦窯(増補版)』雄山閣 1997

注9 これまでは平窯を無牀式と有牀式として区分されてきたもので、文化庁編では牀が床の俗字で正確な表現ではないとの考えから「有畦式」と改名されたもので、その表現に準拠して呼称する。

注10 有井広幸・石井清司「第2章 梅谷瓦窯」(『京都府遺跡調査報告書』第27冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注11 内田真雄『石橋瓦窯跡発掘調査概報-平成14年度-』(『井手町文化財調査報告』第4集 井手町教育委員会) 2000

注12 中島和彦「奈良山第51号窯の調査概要」(『奈良市埋蔵文化財調査年報平成18(2006)年度』奈良市埋蔵文化財センター) 2009

注13 吉田恵二・岡本東三「中山瓦窯」(『奈良国立文化財研究所年報1973』奈良国立文化財研究所) 1974、黒崎直「平城宮瓦窯跡の調査」(『日本考古学年報25(1972年版)』日本考古学協会) 1794

注14 川畑純・石田由紀子・今井晃樹「中山瓦窯の調査-第523次」(『奈良文化財研究所紀要2015』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所) 2015

注15 ここでは前述の後面隔壁に対して前面隔壁と呼称している。

注16 有畦式平窯では前面隔壁があることで、明確に窖窯にみられた燃焼部と焼成部が区分できるために、燃焼室と焼成室と呼称を替えている。

注17 瓦窯での生瓦の窯入れ状況を示す資料は少ない。これは、当然のことながら生瓦を焼成した後、製品として取り出し、その窯での作業が終了した段階で、窯は廃棄されるためであり、考古資料としては廃棄された窯の調査を観察しているのが実情である。何らかの原因により窯入れの段階で廃棄されるものは限られているが、窯入れの状況を考える上での重要な資料が、京都市栗栖野6号窯、静岡県磐田市寺谷瓦窯である。栗栖野6号窯は飛鳥時代の窖窯で、生瓦は窯の主軸に対して平行するように狭端面を床にして立並べており、生瓦の2段目も同様に並べている。一方、寺谷瓦窯は有畦式平窯と思われる瓦窯で、生瓦は、一段目は窯の主軸に対して平行に据えているが、2段目は窯の主軸に対して直交するように据えている。2段目の生瓦の据え方は、単に生瓦を焼成するために並べたものではなく、燃焼部からの焰を天井にむけるように、焰に直交させて火盾の役割を考慮して並べていた可能性が考えられる。窖窯と有畦式平窯では窯入れされる生瓦の据え方にも違いがある。

注18 竹原一彦「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成18年度発掘調査報告(2) 鹿背山瓦窯跡第1次」(『京都府遺跡調査報告集』第126冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008

注19 八賀晋・西村康「奈良山第53号窯の調査概要」平城団地第8号遺跡調査委員会 1971

注20 兵庫県加東郡教育委員会現地説明会資料、森下大輔「埴谷瓦窯の紹介」第71回歴史考古学研究会 2004

注21 森内秀造「播磨の瓦窯構造」第13回窯跡研究会瓦窯の構造研究 5 瀬戸内地域の様相 2015

注22 森島康雄・奥村茂樹「第4章 市坂瓦窯」(『京都府遺跡調査報告書』第27冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注23 有井広幸「煙道部をもたない平窯構造について」(『京都府埋蔵文化財論集』第5集 (財)京都府埋

蔵文化財調査研究センター) 2006

注 24 4 ケタの数字は藤原・平城宮軒瓦型式名で表記している、以下同じ。

注 25 奥村茂樹「第 6 章 第 9 節 市坂瓦窯の瓦」(『京都府遺跡調査報告書』第 27 冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注 26 森島康雄「第 6 章 考察 第 3 節 市坂瓦窯・五領池東瓦窯の遺構」(『京都府遺跡調査報告書』第 27 冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注 27 有井広幸「第 5 章 五領池東瓦窯」(『京都府遺跡調査報告書』第 27 冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注 28 古閑正浩は有畦式平窯の規模と畦、分焰柱に斉一性があり、平安京造営に伴う西賀茂瓦窯成立以前の有畦式平窯は分焰柱が畦よりも少ないとの指摘がある。

古閑正浩「平安京初期の造瓦組織」(『考古学雑誌』第 99 巻 第 1 号 日本考古学会) 2017

注 29 森島康雄「第 6 章 考察 第 3 節 市坂瓦窯・五領池東瓦窯の遺構」(『京都府遺跡調査報告書』第 27 冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注 30 岡本東三ほか「音如ヶ谷瓦窯の調査」(奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部編『奈良山－Ⅲ平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』京都府教育委員会) 1979、平良泰久「音如ヶ谷瓦窯跡」(『木津町史 資料編 I』木津町) 1984

注 31 法華寺の造営時期については天平 17 (745) 年の平城宮還都後に開始されたと思われるが、造営開始時期を示す明確な史料はない。

注 32 毛利光俊彦・花谷浩「第 IV 章 考察 1 屋瓦」(『平城宮発掘調査報告 X Ⅲ』奈良国立文化財研究所) 1991

注 33 奥村茂樹は 6714 A 軒平瓦の範傷の状況から、I・II 号窯を同時期操業と考えている。

奥村茂樹「法華寺阿弥陀浄土院の造営」(『佛教藝術』257 号) 2004

注 34 音如ヶ谷瓦窯をその出土遺物から有畦式平窯の最古例とも考えられているが、古閑正浩は窯の構造変化から最古例に疑問を呈している。私見でも最古例を市坂瓦窯が、窯構造から見て音如ヶ谷瓦窯に先行していると考えている。古閑正浩「平安京初期の造瓦組織」(『考古学雑誌』第 99 巻 第 1 号 日本考古学会) 2017

平成28年度発掘調査略報

11. 佐伯遺跡

所在地 亀岡市葎田野町佐伯

調査期間 平成28年5月9日～平成29年3月2日

調査面積 14,500㎡

はじめに

佐伯遺跡は、亀岡市葎田野町佐伯に所在する縄文時代から中世にかけての集落遺跡として周知されている(第1図)。

佐伯遺跡の調査は、国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」の実施に伴い、京都府教育委員会と亀岡市教育委員会の試掘調査の結果を踏まえ、当調査研究センターが平成27年度から発掘調査を継続して実施している。今回の調査は第8次調査となる。

平成27年度調査では、古墳時代後期の竪穴建物13基や奈良時代から平安時代の掘立柱建物7棟などを検出し、古墳時代後期から平安時代にかけて断続的ではあるが集落が営まれていたことがわかった。また、遺跡の南東部の調査で縄文時代中期(約5,500～4,500年前)の土器が出土している。

平成28年度の調査は、本調査区地(6～15トレンチ)と小規模調査で遺構を確認し拡張調査となった地区(A-1、B-3～6トレンチ)で実施した。また、2月には小規模調査を実施した。

調査概要

今回の調査で検出した主な遺構・遺物について報告する(第2図)。

6トレンチ 古墳時代後期(6世紀後半)の竪穴建物3基や奈良時代から中世にかけての柱穴などの遺構を検出した。

7トレンチ 南北棟となる東西2間、南北4間の掘立柱建物を1棟検出した。柱穴から遺物の出土がないが、周囲で出土した遺物などからは奈良から平安時代の建物と考えられる。また、蹄脚円面硯の破片や緑釉陶器の破片(写真1)などが出土した。

8・9トレンチ 8トレンチでは南北方向の溝、9トレンチでは東西方向の蛇行す



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000 亀岡)

る自然流路を検出した。流路の時期については不明である。

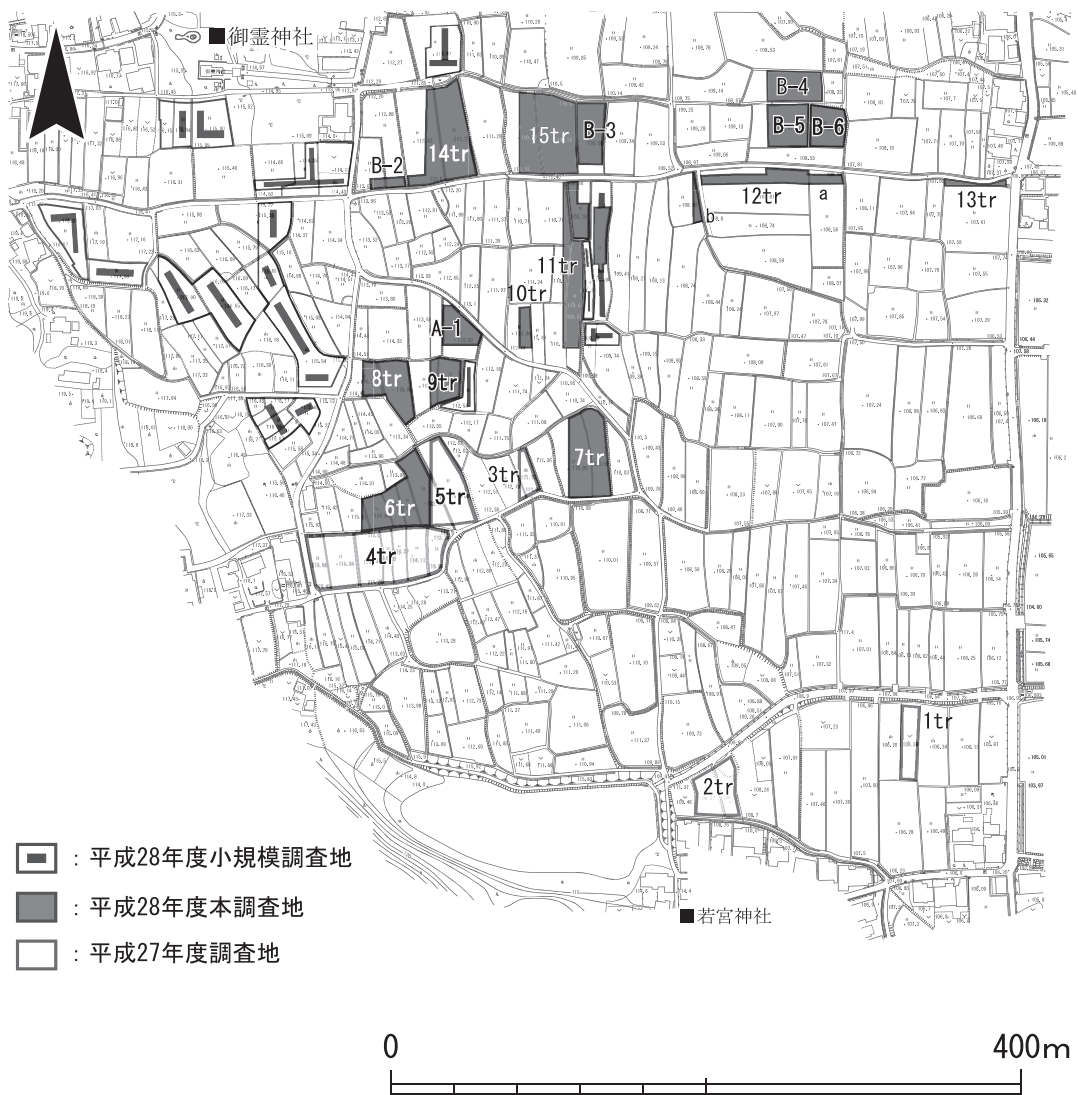
10トレンチ 一辺が約1.8m、深さは約0.7mの方形の掘形をもつ平安時代の井戸を検出し、底には木製の井戸枠の一部が遺存していた。

11トレンチ 北半部では東西方向の蛇行する自然流路などを検出した。

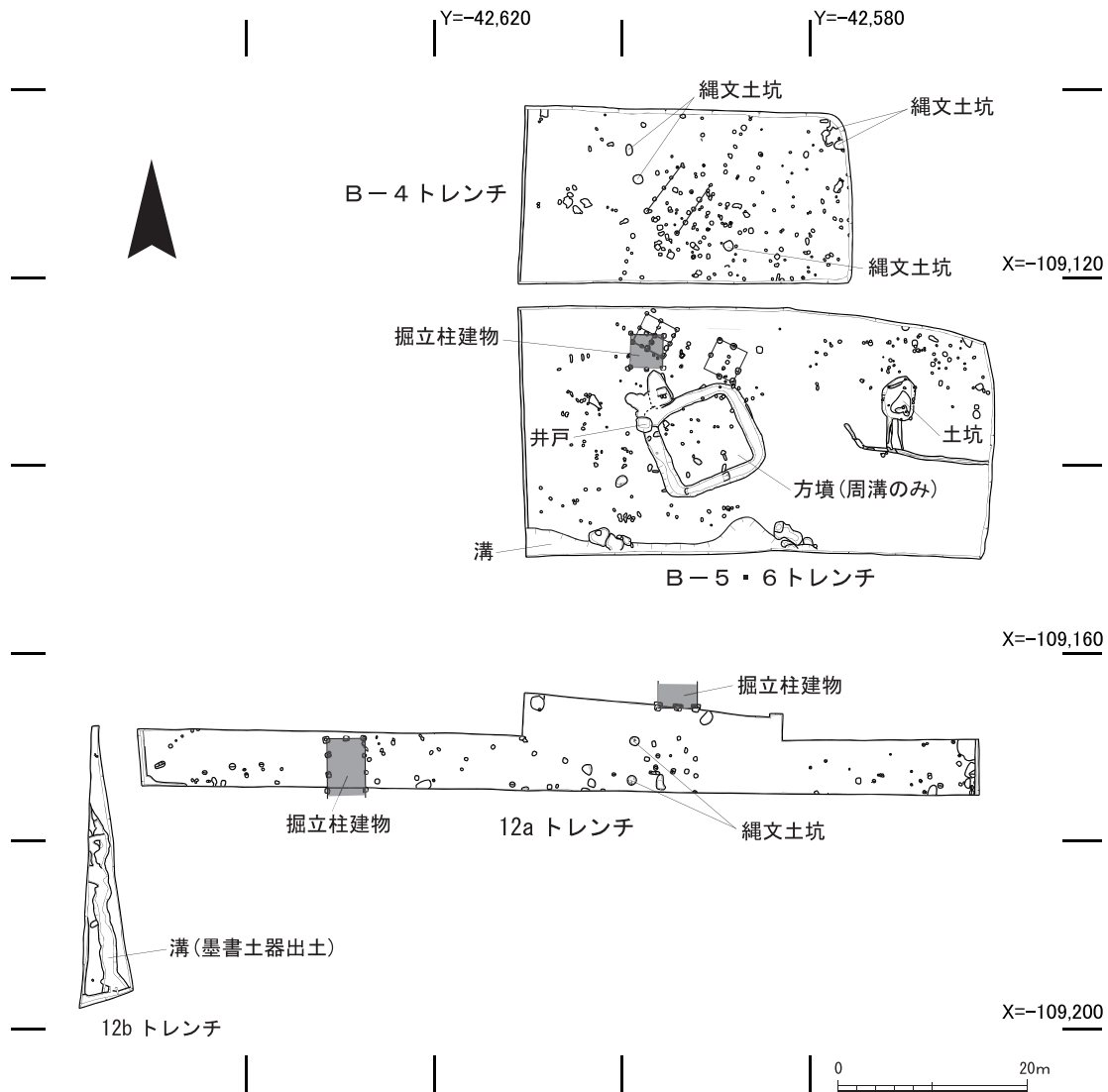
12ー a・b トレンチ 東西に長い調査区を12ー a トレンチ、西側の調査区を12ー b トレンチとして調査を実施した(第3図)。

12ー a トレンチでは奈良時代の掘立柱建物を2棟検出した。1棟は南北棟で東西2間、南北3間以上の建物と思われる。もう1棟は建物南端の2間分の柱穴3基のみ検出しており、柱穴が東西・南側に展開しないことから、調査区外の北側へ広がると考えられる。なお、2棟とも柱穴は隅丸方形を呈し主軸はほぼ真北を向く。また、同一面で縄文時代後期の土坑と思われる遺構も検出した。

12ー b トレンチで検出した南北溝からは、須恵器の杯身や蓋など奈良時代の遺物が出土し、そ



第2図 調査地区配置図



第3図 12トレンチ・B-4～5トレンチ平面図

のなかに杯の底部外面に「正福」と墨書されたもの(写真2)や漆が付着した須恵器があった。

14トレンチ 小規模ながら円形の柱掘形を持つ平安時代の掘立柱建物(南北2間、東西3間の東西棟と東西2間、南北2間以上の南北棟)2棟を検出した。また、土坑から緑釉陶器片が出土した。

B-4・B-5・B-6トレンチ 奈良時代から鎌倉時代の遺構を検出した。B-5トレンチではほぼ真北を向く南北2間、東西3間以上の東西方向の掘立柱建物と東西1間、南北2間の掘立柱建物を検出した。また、方位が異なる建物を検出した。

井戸や東西方向の溝から奈良時代の土器が出土した。また、周囲を方形の溝で囲われた古墳を1基検出した。墳丘や埋葬施設は削平を受け残存していない。溝の一辺の長さは約8mを測り、古墳時代中期末から古墳時代後期初頭の須恵器の杯や甕などが出土した。これまで佐伯遺跡内で古墳は確認されておらず、名称について京都府教育委員会・亀岡市教育委員会と協議し、小字名から「大日堂古墳」と名付けることとなった。



写真1 蹄脚円面硯



写真2 墨書土器「正福」

まとめ

今回の調査で12・B-5トレンチでは奈良時代のほぼ真北に方位をそろえた掘立柱建物が3棟と平安時代の掘立柱建物2棟、14トレンチでは平安時代の掘立柱建物2棟を検出した。

特に12トレンチで検出した掘立柱建物は、これまでの佐伯遺跡で検出した掘立柱建物群と比べ、建物の主軸が真北に向く建物を検出し、その柱穴の形は方形を呈しており、注目する要素である。

佐伯遺跡で検出した掘立柱建物などの遺構は、後世の土地利用によって全体として大きく削られているため、残された遺構の残存状況からでは、建物の詳しい配列や、性格を探ることは困難であるが、方位を北にそろえた掘立柱建物を検出したこと、遺物では一般集落では出土が稀な蹄脚円面硯や墨書土器が出土したことから、奈良時代では一般的な集落ではなく、何らかの役所的な施設が存在した可能性も考えられる。

さらに、周辺の平野部では古墳の分布が不明であったが、今回の調査で新たに古墳が確認され、平野部での古墳の分布や集落との関係を考える上で貴重な資料となった。

(村田和弘)

12. 芝山遺跡第16次(B地区)

所在地 城陽市富野中ノ芝他

調査期間 平成28年4月25日～平成29年3月3日

調査面積 3,188㎡

はじめに 今回の発掘調査は、新名神高速道路整備事業に伴い、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した。新名神高速道路の建設予定地の芝山遺跡での範囲では、着手した順にアルファベットで地区名を付した。芝山遺跡は、これまでの発掘調査で古墳や奈良時代の掘立柱建物などを検出している。調査区の北には、梅の子塚1・2号墳が同一丘陵上に位置する。

調査概要 調査の結果、方墳2基(古墳1・2)、埴輪棺3基などを検出した。遺物には、青銅鏡2点、勾玉1点、管玉13点、石釧片1点などがある。

古墳 古墳1は、一辺9.0mの方墳で、幅2.0m、深さ0.3mの周溝が巡る。墳丘のほぼ中央で東西方向に全長4.5m、幅1.6mの埋葬施設1基を検出した。埋葬施設は、割竹形木棺を納め、木棺の小口部分を粘土で固定し、棺身と棺蓋が接する側辺部を粘土で目張りしたと推測される。副葬品は出土しなかった。古墳2は、一辺13.0mの方墳で、幅3.0m、深さ0.6mの周溝が巡る。墳丘上で東西方向に埋葬施設3基を検出した。埋葬施設1は、全長6.5m、幅1.5m、埋葬施設2は全長6.7m、幅0.6mとともに割竹形木棺を納め、木棺の小口部分を粘土で固定し、棺身と棺蓋が接する側辺部を粘土で目張りしたと推測される。中央より東寄りの位置から木片が付着した直径11.5cmの青銅鏡と、そのすぐ西側で長さ5.35cmのメノウ製勾玉1点、長さ2.6～4.15cmの碧玉・緑色凝灰岩製の管玉13点が出土した。埋葬施設3は、全長2.6m、幅1.0mの土壇墓である。

埴輪棺 埴輪棺は、円筒埴輪や朝顔形埴輪を組み合わせたものを3基検出した。埴輪棺2は、南側の小口に盾と推定される線刻を施した埴輪片で塞がれていた。埴輪には朱が塗られている。

その他の遺物 調査区北西端の表土直下より直径9.5cmの獣形鏡1点、竹の根の攪乱から長さ4.6cmの石釧片が出土した。

まとめ 古墳1・2や埴輪棺は、古墳時代前期末から中期前半と考えられる。古墳時代前期の首長墳である梅の子塚古墳と同丘陵上にあり、一辺10m前後の小規模古墳であるが、鏡や玉類の副葬品が納められていたことから梅の子塚古墳に葬られた首長に関わる人物が埋葬されたと推測される。また、表土直下出土の遺物から、後世の土地利用により破壊された古墳が存在したと推測する。(岡村美知子)



調査地位置図(国土地理院1/25,000 宇治)

平成 28・29 年度発掘調査略報

1. 北大塚古墳

所在地 京都府綴喜郡井手町井手大塚他

調査期間 平成28年7月21日～10月28日、平成29年1月5日～1月31日
平成29年4月5日～5月30日

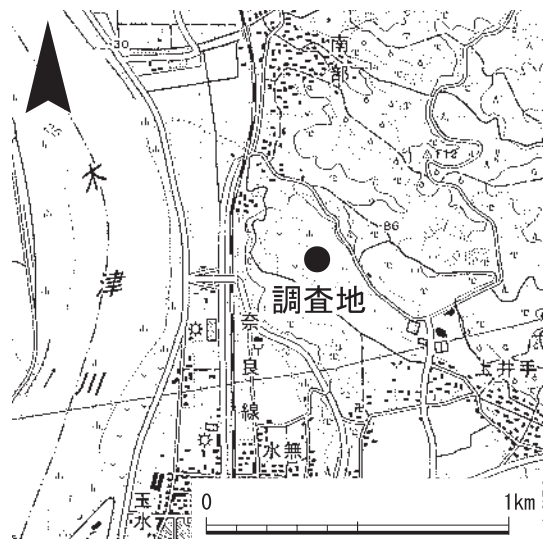
調査面積 1,848㎡

はじめに 北大塚古墳の発掘調査は、新設特別支援学校(井手地区)建設計画地造成工事に伴い、京都府教育委員会の依頼を受けて実施した。北大塚古墳は、明治・大正期にすでに周囲で埴輪片が採集され、石室の存在が指摘されるなど古くから知られていた古墳である。

調査概要 今回の調査は平成28年度の調査で検出した3基の横穴式石室を内部主体とする古墳を対象としたものである。また、平成29年度調査において新たに1基の古墳を検出した。

1号墳 調査地内最高地に位置する両袖式の横穴式石室をもつ円墳である。墳丘規模は16.0mを測る。竹林に伴う造成で墳丘の西半部は残存していない。墳丘北東側では弧状を呈する溝を検出した。周溝は全周せずに、丘陵から墳丘を切り離すように掘削されたと考えられる。石室は石材の抜き取りにより、石材の大半が失われていた。石室の規模は全長9.9m、玄室幅1.5mを測る。副葬品は、石材の抜き取り時に石室外に投棄されたのか、南東側の墳丘斜面から出土している。また、羨道内の堆積土や石材の隙間からは耳環が出土している。副葬品は、須恵器高杯・杯・杯蓋・脚付長頸壺、耳環、鉄鏃などがある。

2号墳 1号墳の南に位置する片袖式の横穴式石室をもつ円墳である。墳丘規模は16.0mを測る。後世の削平により、西側の墳丘は消失している。墳丘の背後で、幅1.98m、深さ0.38mの周溝を確認した。1号墳と同様に全周せずに、馬蹄形にめぐっていたものと考えられる。石室は奥壁、側壁の基底石の一部が残存していた。石室上面では近現代以降の石材抜き取り痕と中世以降の再利用の痕跡が認められた。再利用には人頭大の円礫を石室に敷き、その上に炭を敷き詰めていた。炭層からは土師器皿、瓦器碗が大量に出土した。また羨道側壁の石材抜き取り痕からは、土師器などともに飛鳥I併行期の土師器杯Cが1点出土した。石室内は再利用により、埋葬面は消失していた。



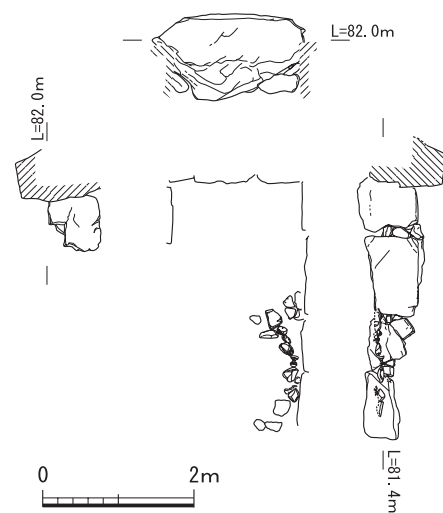
第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 田辺)

古墳時代の遺物として、須恵器^Ⅹ、耳環が出土している。

3号墳 1号墳の南東に位置する無袖式の横穴式石室と考えられる古墳である。後世の削平により、墳丘・石室の破壊が著しく、墳形や石室形態を復原することは難しい。近接する4号墳の状況から同規模の古墳であったと考えられる。

4号墳 南に開口する無袖式の横穴式石室をもつ円墳である。残存状況はあまりよくないが、両側壁の基底石が玄室から羨道にかけて残存しているものと考えられる。ただし、玄室と羨道を区別する石材は判然としない。

石室規模は長さ3.7m、幅0.98mを測る。周囲には幅0.8～



第2図 2号墳石室平面図

0.9m、深さ0.17～0.32mの周溝がめぐる。石室北東側で周溝は一旦途切れるような形状を呈している。周溝から復原すると墳丘規模は6.9mである。副葬品は飛鳥Ⅰ併行期の須恵器杯蓋が1点出土している。

まとめ これまで北大塚古墳は単独の古墳とされていたが、調査の結果、横穴式石室を埋葬施設とする古墳時代後期から飛鳥時代にかけて築造された群集墳で、少なくとも4基から構成されることが判明した。南山城地域においても井手町周辺の古墳時代後期から終末期の状況は不明な点が多いことから、井手町や南山城地域の古墳時代を考えるうえで重要な成果といえよう。

(竹村亮仁)

表 北大塚古墳規模等一覧

古墳番号	墳丘		石室（m）							出土遺物	備考	
	墳形	規模（m）	形式	全長	玄室		羨道		残存高			方位
1号墳	円	16.0	両袖	9.9	検出長	3.2	長さ	3.14	0.24	N- 4° -W	須恵器・耳環（金環1、銀環2ともに中実）・鉄鏃1、鉄釘5・陶磁器	玄門付近閉塞石残る、玄室石材ほとんど残存せず
					幅	1.5	幅	0.92				
2号墳	円	16.0	右片袖	4.5	検出長	3.1	長さ	1.2+	0.8	N-10° -E	須恵器・耳環（金環1中空）・土師器、瓦器	中世再利用
					幅	1.6	幅	0.8+				
3号墳	不明	不明	無袖か	不明	不明		不明		0.17	N-11° -E	耳環（金環2）、土師器	石材2石のみ残存、攪乱により破壊が著しい
4号墳	円	6.9	無袖	2.94	検出長	3.7	－		0.18	N-10° -E	須恵器、土師器	墳丘残存せず
					幅	0.98						

参考文献

浜田耕作「山城における原史時代の遺物遺跡1」（『東京人類學會雑誌』第182号 東京人類學會）

1901

梅原末治「井手発見ノ石器ト両大塚古墳」（『京都府史蹟名勝調査會報告』第4冊 京都府）1923

2. 岡田国遺跡第 4・5 次

所在地 木津川市木津馬場南

調査期間 第 4 次：平成 28 年 5 月 26 日～平成 29 年 2 月 28 日

第 5 次：平成 29 年 4 月 19 日～平成 29 年 9 月 14 日

調査面積 第 4 次：5,500㎡、第 5 次：2,260㎡

はじめに 今回の調査は、一般国道 163 号木津東バイパス建設事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて実施した。岡田国遺跡は井関川中流域右岸の氾濫平野に所在する旧石器時代から近世の遺跡である。

調査概要 発掘調査の結果、古墳時代から室町時代までの遺構を検出したが、特に成果のあった奈良時代について報告する。

南北方向の道路側溝 2 条(S D 160・S D 190)を持つ道路 1 では、路面に轍と考えられる並行する細い溝を検出した。東西方向の道路側溝 2 条(S D 165・S D 200)を持つ道路 2 は、道路 1 と調査区中央部南側で交差する。

道路 1・2 で区画された地割の北東部から掘立柱建物 6 棟(建物 1～6)、井戸 1 基(S E 152)を検出した。区画の北西隅には規模の大きな建物 1 があり、小規模な建物 2～6 が北側に近接して配置されている。建物は方位や柱列がそろっており、計画的に配置されたことが分かる。建物 5 と建物 6 には重複関係があり、建物 6 が先に建てられていた。また、井戸 S E 152 の周囲に空閑地が広がる。井戸は円形素掘りの井戸で「越後」と書かれた墨書土器などが出土した。

建物群の北側と東側に東西方向の溝群を検出した。建物群と溝群は南北方向の溝 S D 460 で区画され、溝群は S D 460 を境にその主軸が異なる。

調査区北西側から縦板横棧組の井戸 S E 540 を検出し、奈良時代の遺構がさらに広がることが分かった。井戸枠内から横櫛、刀子などが出土した。

遺跡内での遺物量は少ないが、和同開珎、埴、円面硯、墨書人面土器も出土している。

まとめ 道路により区画された空間に建物群や井戸が計画的に配置されていたことが判明した。また、建物群の北側には S D 460 で区画される溝群が存在し、建物や道路に規制されていることから同時代に計画的に掘削されたと考えられる。溝群は農耕または湿地の排水に利用された可能性がある。

(福山博章)



第 1 図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 奈良)

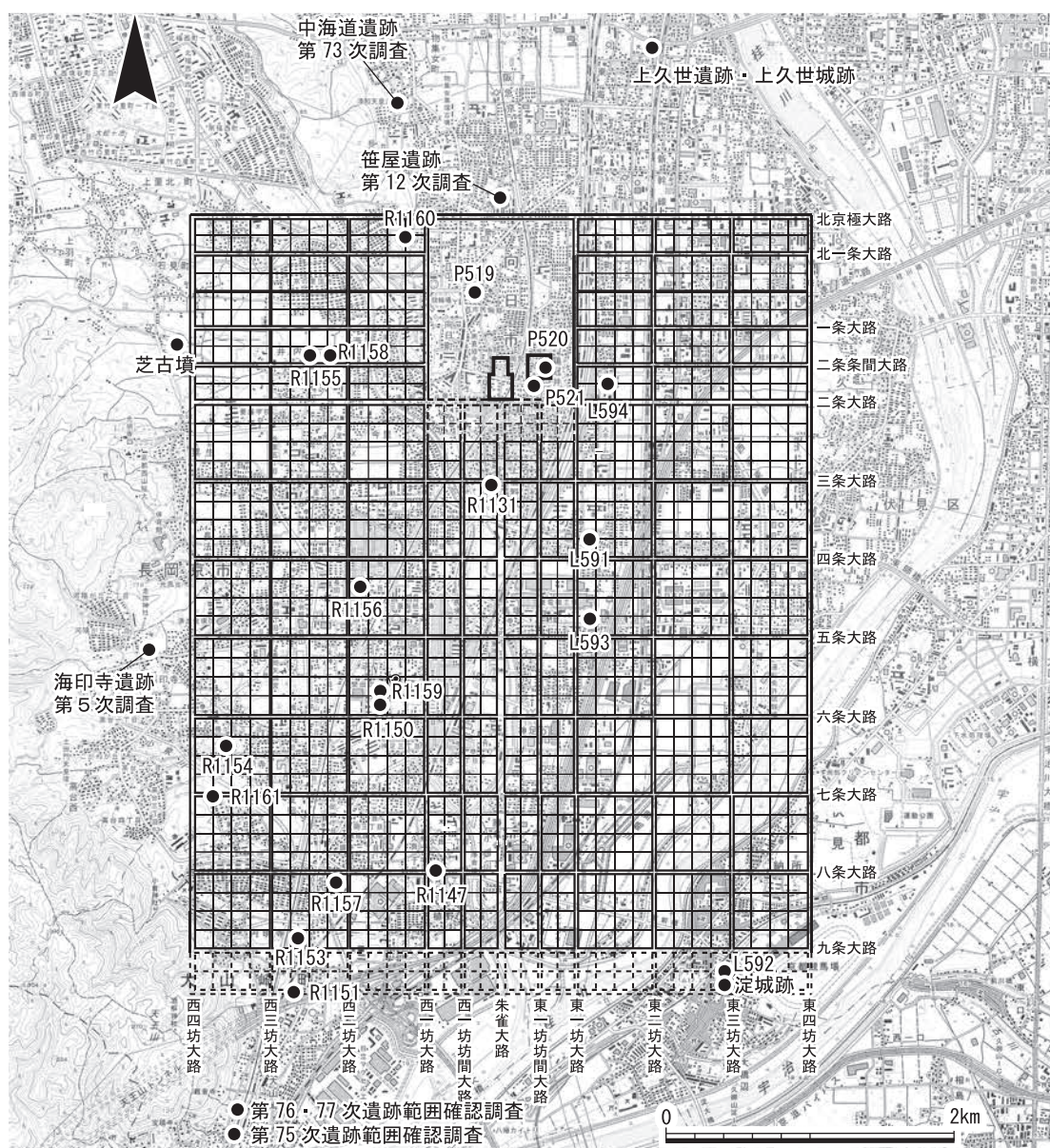


第 2 図 トレンチ平面図 (1/600)

長岡京跡調査だより・128

長岡京跡の発掘調査成果等に関する情報交換や、資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な調査・研究に寄与することを目的に、毎月1度、長岡京跡を発掘調査している機関が集まって、長岡京連絡協議会を実施している。今回は、平成29年2月から7月の例会で報告のあった、宮域3件、左京域4件、右京域12件、京域外9件の合計28件のうち、主要なものについて報告する。

宮域 朝堂院北西官衙推定地の第519次調査(向日市寺戸町)では、左京域で検出されている一条条間小路南側溝の延長上に位置する溝状遺構が検出された。また、内裏「東宮」に位置する第520次調査(向日市鶏冠井町)では、近世の鶏冠井村檀林(寺院)関連の溝状遺構や、墨書土器等の



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

遺物が出土した。長岡京期の遺構では、大形掘立柱の柱穴が2基見つかり、内裏内郭の建物の何かにあたるものと推定される。内裏南辺部に当たる第521次調査(向日市鶏冠井町)では、内裏を囲む築地外郭に当たる東西方向の溝を再調査し、遺存していた整地土をした。

左京域 全体的に右京域の調査事例が少なく、報告があったのは3件である。第592次調査(京都市西京区)では、長岡京期の明確な遺構・遺物は検出されなかった。また、調査区は淀城の所在地でもあり、絵図によれば米倉前の空閑地であったようで、土坑以外には明確な遺構は検出されなかった。しかし、土坑からは漆喰の塊や、一分金が出土しており、まさに淀城中であることを示した。

第593次調査(長岡京市馬場図所)では、中世の耕作溝と、長岡京期の包含層と土坑を確認したが、明確な長岡京期の遺構は見つかっていない。下層からは、弥生時代前期の土器が出土した。

第594次調査(向日市鶏冠井町)では、長岡京二条条間南小路の南北両側溝及び道路面が検出された。特に、道路面については、一部を掘りくぼめ、黄褐色粘質土・黒褐色粘質土・灰色砂礫などで整地しており、当時の道路整備方法などを解明する上で貴重な成果を得た。

右京域 全体的に長岡京の条坊側溝などを検出する目的での調査が多かったが、条坊に関わる遺構の検出はあまりみられなかった。その中で、第1147次調査(長岡京市久貝二丁目)では、中世の区画溝が上層で見つかり、羽釜や瓦器碗、土師器皿などが出土した。下層の東西溝は、最大幅約3.5m、深さ0.4mを測り、二段掘りの形状を示していた。この溝は、長岡京の八条大路や第3次山城国府を考える上で極めて重要な遺構である。

第1158次調査(長岡京市井ノ内玉ノ上)では、長岡京期の桁行7間、梁行2間で東廂を持つ南北棟の掘立柱建物を検出した。以前の第25次調査では、二条三坊二町のほぼ中心で東西方向の掘立柱建物が見つかっており、今回検出の建物はその西脇殿と考えられる。

第1159次調査(長岡京市開田三丁目)では、中世の東西溝や土坑のほかに、長岡京六条条間小路の南側溝と、西二坊坊間小路の東西両側溝を検出した。この調査で西二坊坊間小路の規模が判明した。しかも、道路は、南北道路を優先して造営されており、東西道路の側溝は途切れていることもわかった。この周辺からは墨書土器も出土している。また、推定宅地内から、掘立柱建物も検出されており、宅地の様子を復原する手がかりが得られた。

京域外 今回は、長岡京跡の発掘調査に伴い、その下層や上層の遺跡としての調査が多く、京域外としては大山崎町教育委員会が実施する遺跡範囲確認調査と、京都市内の芝古墳、淀城跡等が挙げられる。

大山崎瓦窯の範囲確認調査(大山崎町白味才)では、大山崎瓦窯の7号窯と8号窯が検出された。すでにこれまで見つかった窯跡同様、約6m間隔で配置されていることもわかり、計画的に施工されたことが明らかになった。また、8号窯の約6m北側でも瓦溜まりが検出されているが、8号窯以北には窯跡が存在しないことが確認されており、これらの瓦溜まりの瓦は不要瓦を廃棄した可能性が高まっている。

(土橋誠)

現地公開状況(平成29年2月～平成29年9月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財の発掘調査の成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくため、当調査研究センターが発掘調査を実施している京都府内の遺跡について現地説明会や遺跡見学会などの現地公開を行っている。

現地説明会

5月13日(土)に城陽市芝山遺跡第16次調査B・D地区の現地説明会を実施した。B地区では、古墳時代前期末から中期前半の方墳2基と埴輪棺3基、D地区では、古墳時代後期前半から中頃の円墳2基を検出した。当日はあいにくの雨であったが、106名の方が参加された。



芝山遺跡現地説明会

5月20日(土)に井手町北大塚古墳の現地説明会を実施した。今回の調査では、横穴式石室を持つ4基の古墳を確認した。これまで単独の古墳と考えられていた北大塚古墳が群集墳であることが判明した。当日は、日差しが強い中、111名と、多くの方が参加された。

7月26日(水)に京丹後市久美浜町女布遺跡(古墳時代竪穴建物等)で関係者説明会を行い、地元女布地区を中心に20名の参加があった。

8月26日(土)に京丹後市峰山町丹波丸山古墳群の現地説明会を実施した。丹波丸山古墳群では、7基の古墳を調査した。もっとも大きい古墳からは、埋葬施設を5つ検出した。また、この古墳の中心となる埋葬施設からは、被葬者の頭部と考えられる位置で鉄製の鉢が1本が出土した。当日は天候に恵まれ、76名の方が参加された。

8月27日(土)に木津川市岡田国遺跡にて現地説明会を実施した。今回の調査では、昨年度調査で検出した道路状遺構の続きと、建物群の北と東側に素堀の溝を検出した。建物群の区画が平城京における1/16町規模の宅地とほぼ同じ大きさであることが判明した。当日は京都府外からも多くの方が来られ、86名の参加者を得た。



(菅博絵)

岡田国遺跡現地説明会

普及啓発事業(平成29年 2 月～平成29年 9 月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくため、埋蔵文化財セミナーや展覧会をはじめ、「関西考古学の日」関連事業、向日市まつりへの参加などの普及啓発活動を行っている。

第134回埋蔵文化財セミナー

第134回埋蔵文化財セミナーを、2月25日(土)に城陽市城陽市立福祉センター1階ホールにて実施した。

今回のセミナーでは『南山城の古代都城と役所を探る』をテーマとして、報告1を、城陽市教育委員会小泉祐司課長補佐兼文化財係長事務取扱が「城陽市域における奈良時代の寺院と役所について」を報告され、報告2を当調査研究センター清水早織調査員が「城陽市芝山遺跡の発掘調査成果とその意義について」を報告し、報告3を京都府教育庁副主査古川匠氏が「恭仁宮跡朝集院の発掘調査成果から」を報告された。山城地域だけでなく、京都府内外からも多く参加していただいた。62名の参加者を得られ、無事終了した。

第135回埋蔵文化財セミナー

第135回埋蔵文化財セミナーを、6月10日(土)にふるさとミュージアム丹後(京都府立丹後郷土資料館)で実施した。

今回のセミナーは、『『丹後国独立!』～遺跡が語る古代の丹後～』をテーマとして、基調講演を京都府立大学菱田哲郎教授が「律令国家のなかの丹後国」を講演され、報告1を宮津市教育委員会河森一浩主任が「丹後国府を探る～宮津市府中地区の調査～」を報告され、報告2を当調査研究センター筒井崇史企画調整係長が「丹後の先進技術～塩・鉄・織物～」を行った。

当日は、丹後地域のみならず、京都府内外からも来場され、計69名の参加者を得て、盛況のうち終了することができた。

また、第135回埋蔵文化財セミナーに関連する出土品等の展示を、同資料館にて、平成29年6月6日(火)から6月16日(日)の間に実施した。期間中やセミナー終了後に多くの来館者に見学していただいた。



第135回埋蔵文化財セミナー会場風景



「発掘された京都の歴史2017」会場風景
(於：向日市文化資料館)

発掘された京都の歴史2017 木とともに生きる～道具のいまむかし～

毎年夏に開催していた『小さな展覧会』は、府民の皆さまに史跡や埋蔵文化財に対する理解・関心をより深めていただくために今年度から『発掘された京都の歴史』と名を改め、平成29年8月5日(土)から8月27日(日)まで向日市文化資料館にて、また、平成29年9月9日(土)から9月24日(日)までふるさとミュージアム

山城(京都府立山城郷土資料館)にて巡回展を行った。

速報展示「発掘された京都の歴史2017」として、平成28年度に京都府内で発掘調査を実施した遺跡の中から19遺跡の調査成果を展示した。また、企画展示「木とともに生きる～道具のいまむかし～」として、平成24年度から継続的に調査している城陽市下水主遺跡出土の木製品を中心に、古墳時代前期の木製品を展示し、民具との比較展示を行った。

展示期間中は、猛暑や台風に見舞われたが、両館あわせて、2,800名を超える入館者を得た。

稗田野町夏祭り

8月15日(火)に開催された稗田野町夏祭りに、同町内にて発掘調査中の佐伯遺跡の遺跡紹介・遺物展示を自治会館別館にて実施した。今年で2回目の参加であり、多くの方が見学に来られ、佐伯遺跡への興味関心の高さがうかがえた。

勾玉をつくろう！

8月16日(水)から8月18日(金)にかけて当調査研究センター研修室にて「勾玉をつくろう！」と題し乙訓地域の小学校4年生以上の児童とその保護者を対象に実施し、185名の参加者を得た。



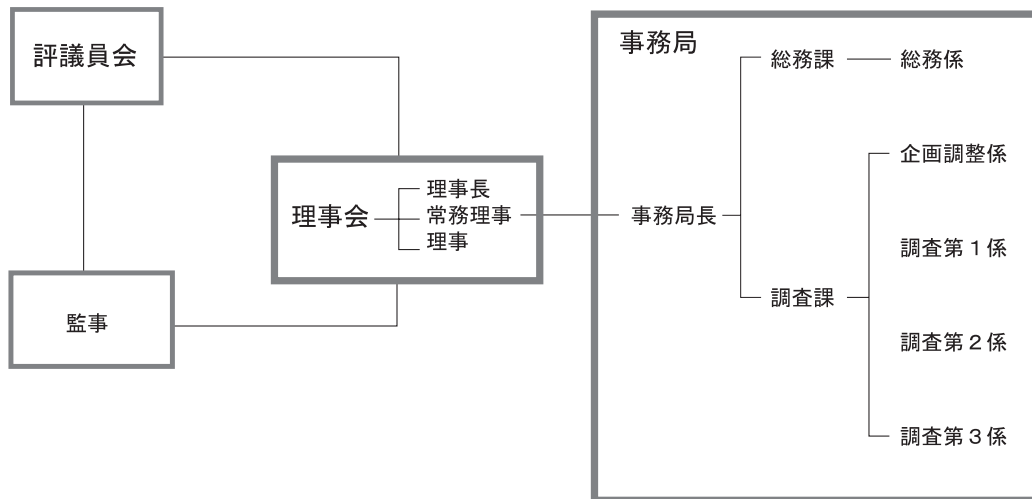
砥石を使用して勾玉の形に成形する様子

勾玉の起源や向日市文化資料館で開催している「発掘された京都の歴史2017」で展示された城陽市芝山遺跡出土の瑠璃製勾玉や城陽市久津川車塚古墳出土滑石製勾玉を実見した。その後、装飾品の歴史について学習し、勾玉づくりを体験した。

児童らは、製作した勾玉を好きな色に着色し、大切に持ち帰った。

(菅博絵)

平成29年度のセンターの組織



センターの動向 (平成29年2月～平成29年9月)

月	日	事 項
2	10	第2回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック 主担者会議(於：大津市)
	14	都出理事芝山遺跡(城陽市)現地指導
	17	第2回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿地区コン ピュータ等研究委員会(於：京都市)
	22	長岡京連絡協議会
	24	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議 (於：向日市)
	25	第134回埋蔵文化財セミナー(於：城陽市 参加者62 名)
3	22	長岡京連絡協議会
	23	第22回理事会(於：京都市)
4	5	北大塚古墳(井手町)現地調査開始(～5月30日)
	17	芝山遺跡(城陽市)現地調査開始
	18	美濃山遺跡(城陽市)現地調査開始
	19	岡田国遺跡(木津川市)現地調査開始(～9月14日)
	26	長岡京連絡協議会
5	2	小樋尻遺跡(城陽市)現地調査開始
	8	佐伯遺跡(亀岡市)現地調査開始
	11	全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於：山口県 ～12日)
	13	芝山遺跡(城陽市)現地説明会(参加者106名)
	15	磯野理事北大塚古墳現地指導
	17	増田理事金堀遺跡(精華町)・岡田国遺跡(木津川市) 現地調査指導
	18	金堀遺跡(精華町)現地調査終了
	20	北大塚古墳(井手町)現地説明会(参加者111名)
	24	長岡京連絡協議会
	30	北大塚古墳(井手町)現地調査終了(4月5日～)
6	1	女布遺跡(京丹後市)現地調査開始(～7月28日)
	2	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者 会議(於：長岡京市)
	9	第23回理事会(於：京都市)
	10	第135回埋蔵文化財セミナー(於：宮津市 参加者69 名)
	15	全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(於：横浜市 ～16日)
	26	第7回評議員会(於：京都市)
	28	長岡京連絡協議会
7	20	増田理事小樋尻遺跡現地指導
	26	長岡京連絡協議会、女布遺跡(京丹後市)関係者説明 会(参加者20名)
	28	女布遺跡現地調査終了(6月1日～)
8	4	第1回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック コンピュータ等研究委員会(於：枚方市)
	5	「発掘された京都の歴史2017」開始(於：向日市 ～ 8月27日)
	7	京まなび教室、らくしんすくすく教室(於：長岡京 市立長法寺小学校 参加者5名)
	8	丹波丸山古墳群(京丹後市)現地調査開始(～9月21 日)
	16	夏の考古学体験講座「勾玉をつくろう！」(参加者 185名 ～18日)
	21	水主神社東遺跡(城陽市)、上野遺跡(京丹後市)現地 調査開始
	22	阿良須遺跡(福知山市)現地調査開始
	23	役員協議会(於：向日市)
	24	長岡京連絡協議会
	26	丹波丸山古墳群(京丹後市)現地説明会(参加者76名)
	27	「発掘された京都の歴史2017」終了(於：向日市 参 加者2,189名 8月5日～)、岡田国遺跡(木津川市) 現地説明会(参加者86名)
9	2	関西考古学の日 秋の考古学講座「軽石の考古学」 (参加者 17名)
	9	「発掘された京都の歴史2017」開始(於：木津川市 ～9月24日)
	24	「発掘された京都の歴史2017」終了(於：木津川市 参加者641名 9月9日～)
	27	長岡京連絡協議会

編集後記

すがすがしい秋の気配が感じられる季節となりました。ここに『京都府埋蔵文化財情報』第132号が完成いたしましたので、お届けします。ご味讀いただければ幸いです。

本号では、今年度の京都府内における埋蔵文化財の調査成果及び普及啓発事業の成果をお伝えするとともに、当調査研究センター職員による論考を掲載いたしました。

なお、当調査研究センター元理事長故樋口隆康先生を偲び、追悼文を掲載しました。

(編集担当 菅 博絵)

京都府埋蔵文化財情報 第132号

平成 29 年 10 月 16 日

発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER